史　跡

上之国勝山館跡　XI

平成元年度発掘調査整備事業概報

1990・3

上ノ国町教育委員会

史　跡

上之国勝山館跡　XI

―平成元年度発掘調査整備事業概報―

1990・3
上ノ国町教育委員会

序

国指定史跡上之国勝山館跡の環境整備事業は昭和54年に着手し本年をもって11年を経ました。

この間、様々な遺構遺物等が検出され、勝山館跡の重要性が次第に明らかになって参りましたが、尚解明されるべき問題が山積みしております。

また、昭和63年度より勝山館跡調査研究専門員としてお願い申し上げている神奈川大学教授網野善彦先生、東京大学教授石井進先生、京都大学教授朝尾直弘先生、函館大学教授榎森進先生、山形大学教授仲野浩先生には御多忙中にもかかわらず御指導を賜わりましたことを心より御礼申し上げる次第です。

諸先生の御力により勝山館や、中世の上ノ国の世界が１日も早く明らかにされることを願っております。

上ノ国町が構想中の「北海道中世の丘」建設にも勝山館は重要な位置をなすものと思われます。

町づくりの事業との連携もさせながら、更に本事業の前進を期すものであります。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層の御指導、御鞭達を賜わりますようお願い申し上げます。

平成２年３月

上ノ国町教育委員会

教育長　和　泉　定　夫

本文目次

序
本文目次／表目次
例言／引用参考文献

Ⅰ　調査概要……1
Ⅱ　遺構確認調査……1
1　目的……1
2　検出遺構と遺物……3
1　柵列跡……3
(1)位置・概要……3
(2)層序……3
(3)規模・附属施設等……3
(4)焼土……3
(5)出土遺物……3
2　空壕跡……12
(1)位置・概要……12
(2)空壕……12
(3)橋跡……18
(4)出土遺物……23
3　1号土壙……23
(1)位置・概要……23
(2)層序……23
(3)遺物分布状況……23
(4)出土遺物……23
4　2号・3号土壙……29
(1)2号土壙……29
(2)3号土壙……29
5　旧道跡……30
(1)位置・概要……30
(2)旧道跡……30
(3)階段状遺構……30
(4)溝・柱穴……30
(5)出土遺物……30
6　平担部建物跡……31
(1)位置・概要……31
(2)建物跡……31
(3)出土遺物……31
Ⅲ　小括……38
Ⅳ　保存処理……39
Ⅴ　まとめ……40

挿図目次

第1図　調査位置図……2
第2図　調査区位置図・柵列跡土層堆積図……4
第3図　柵列跡平面図……5
第4図　焼土平面・土層堆積図……7
第5図　焼土平面・土層堆積図……8
第6図　柵列跡周辺出土遺物……10
第7図　柵列跡周辺出土遺物……11
第8図　空壕跡層序……13
第9図　橋跡平面図……15
第10図　空壕跡周辺出土遺物……17
第11図　空壕跡周辺出土遺物……18
第12図　1号土壙平面・土層堆積図……19
第13図　1号土壙遺物分布図……20
第14図　1号土壙出土遺物……21
第15図　3号土壙平面・土層堆積図……22
第16図　旧道跡土層堆積図……24
第17図　旧道跡平面図……25
第18図　旧道跡周辺出土遺物……27
第19図　旧道跡周辺出土遺物……28
第20図　建物跡周辺出土遺物……29
第21図　第1号建物跡想定図……32
第22図　第2号建物跡想定図……33
第23図　第3号建物跡想定図……34
第24図　建物跡想定図……35
第25図　第4号建物跡想定図……36
第26図　環境整備……39

表目次

表1　15L25～16L10区土層観察表……7
表2　焼土成分表……8
表3　焼土土層観察表……9
表4　14L22～15L22区土層観察表……16
表5　空壕跡土層観察表……17
表6　1号土壙覆土成分表……20
表7　1号土壙覆土観察表……21
表8　3号土壙層序観察表……22
表9　15L11区トレンチ土層観察表……24
表10　15M14・15M19区トレンチ土層観察表…24
表11　陶磁器集計表……37
附図　調査遺構配置図

写真図版目次

PL・1　遺構検出状況
PL・2　土層堆積状況
PL・3　1号土壙
PL・4　1号土壙出土遺物
PL・5　出土遺物
PL・6　出土遺物
PL・7　遺構検出状況
PL・8　遺構検出状況
PL・9　遺構検出状況
PL・10　出土陶磁器
PL・11　出土陶磁器
PL・12　出土陶磁器
PL・13　出土陶磁器
PL・14　出土陶磁器
PL・15　出土陶磁器
PL・16　出土陶磁器
PL・17　出土遺物（鉄製品ほか）
PL・18　出土遺物（石製品ほか）
PL・19　1号土壙出土遺物
PL・20　木炭・種子・保存処理完了遺物

例　言

1．本書は史跡上之国勝山館跡の平成元年度環境整備事業に伴う遺構確認発掘調査と環境整備事業について概要をまとめたものである。

2．環境整備工事については文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学　足達富士夫先生、建築遺構の調査検討には同じく、文化学院、鈴木亘先生、歴史的考察等については同じく、函館大学　榎森進先生、山形大学　仲野浩先生、東京大学　石井進先生、神奈川大学　網野善彦先生、京都大学　朝尾直弘先生から御指導を賜った。

3．本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。

調査主体者　上ノ国町教育委員会　教育長　和泉定夫

指導　上ノ国町文化財保護審議会特別委員　北海道大学教授　足達富士夫、文化学院講師　鈴木亘

勝山館跡調査研究専門員　函館大学教授　榎森進、山形大学教授　仲野浩、東京大学教授　石井進、神奈川大学教授　網野善彦、京都大学教授　朝尾直弘

主管　上ノ国町教育委員会文化課　課長　関登志夫

修景技術専門員　山崎重任（上ノ国町建設課長）

発掘担当者　学芸員　斉藤邦典

調査員　　学芸員　松崎水穂

4．本書は松崎、斉藤が協議の上斉藤が行った。本書はⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳを斉藤、Ⅴを松崎が執筆した。

5．挿図の作成は執筆者の指示に従い作業員が行なった。挿図中の北方位は真北を示す。

6．写真撮影はみみずく工房　笹野武則氏の御指導を得て斉藤が行った。

7．調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜った。

文化庁記念物課　安原啓示、服部英雄、岡村道雄、加藤充彦、増渕徹、北海道教育庁文化課　畏田敏雄、増田信幸　調査班　森田知忠、田中哲郎　桧山教育局　村山誠己、本村幸生、慶応大学　佐藤孝雄、専修大学　亀井明徳、秋田大学　新野直吉、東北学院大学　大石直正、北海道教育大学　佐々木馨、君尹彦、札幌大学　原田信男、東洋文庫　渡辺兼庸　奈良国立文化財研究所　沢田正昭、元興寺文化財研究所　内田俊秀、東京国立博物館　伊藤嘉章　国立歴史民俗博物館　吉岡康暢、福田豊彦、小野正敏、西本豊弘、小島道裕、佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康二、朝倉氏遺跡資料館　南洋一郎、近江風土記の丘資料館　秋田毅、瀬戸市歴史民俗資料館　藤澤良祐、たばこと塩の博物館　谷田有史、山梨県立考古博物館　田代孝、岩手県立博物館　名久井文明、佐々木清文、福島県立博物館　森幸彦、三春町歴史民俗資料館　原宏、伊藤雄一、中村五郎、平泉町郷土館　荒木伸介、北海道開拓記念館　三野紀雄、山田悟郎、小林幸雄、甲府市史編纂室　数野雅彦、郡馬県史編纂室　能登健、北構保男、鎌倉考古学研究所　手塚直樹、河野真知郎、馬淵和雄、山梨文化財研究所　萩原三雄、石川県埋蔵文化財センター　垣内光次郎、北海道埋蔵文化財センター　大沼忠春、越田賢一郎、三浦正人、遠藤香澄、中田裕香、甲府市教育委員会　佐藤裕仁、鈴木俊雄、能代市教育委員会　紛川村教育委員会　小島純一、鎌倉市教育委員会　玉林美男、浪岡町教育委員会　工藤清泰、木村浩一、八戸市教育委員会　佐々木浩一、藤田俊雄、市浦村教育委員会　佐藤智雄、森町教育委員会　藤田登、八雲町教育委員会　三浦孝一、柴田信一、七飯町教育委員会　石本省三、松前町教育委員会　久保泰、乙部町教育委員会　森広樹、今金町教育委員会　寺崎康史

引用参考文献

新撰北海道史第５巻　福山秘府　1936年
東洋文庫27　東遊雑記　古川古松軒　1964年　平凡社
新北海道史第７巻　新羅之記録　1969年
新版標準土色帳　1967年　農林省
標準色彩図表Ａ　1970年　日本色彩研究所
原色陶器大辞典　1972年　加藤唐九郎
日本陶磁全集15　志野　1975年
〃　7　越前、珠州　1976年
図解考古学辞典　1977年　小林行雄
浪岡城跡Ⅲ～Ⅹ　1979年～1988年　浪岡町教育委員会
上之国勝山館跡Ⅰ～Ⅹ　1979年～1988年　上ノ国町教育委員会
大畑窯跡　1980年　南外村教育委員会
貿易陶磁研究 No.1・No.2　日本貿易陶磁研究会　1981～1982年
島根県立博物館調査報告　1982年　島根県立博物館
大阪城三の丸跡における初期近世窯の様相　1983年　井上喜久男　大阪城三の丸跡Ⅱ
史跡根城発掘調査報告書Ⅳ～Ⅹ　1983年～1987年　八戸市教育委員会
普正寺遺跡　1984年　石川県立埋蔵文化財センター
仙台城三の丸跡　1985年　仙台市教育委員会
愛知県陶磁資料館研究紀要４　1985年　愛知県陶磁資料館
美濃窯の研究　(一)　1988年　井上喜久男　東洋陶磁第15・16号
瀬戸美濃における大窯生産　1988年　伊藤嘉章　岐阜市歴史博物館研究紀要　2
清須　織豊期の城と都市　1988年　東海埋蔵文化財研究会
大阪城跡Ⅲ　1988年　大阪市文化財協会
中世末から近世のまち・むらと都市　1990年　埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会
羽口について　　年　日本鉱業学会誌

I　調査概要

1．調　　査

本年度調査対象地区は館主要平担部北側肩部分及び段下の大手空壕跡周辺である。尚同地区は中央部を東西に御代参道路が走り南北に二分されている。今年度は昭和63年度トレンチ調査を行なった北側部分を行なった。調査は7月13日より12月18日まで行い1400m²実施した。調査方法は従来通り20m×20mの大グリッドを25分割した4m×4mの小グリッド方式とした。また柵列跡周辺、建物跡周辺の調査に際しては従来通り柱穴配置略図を作成し柱穴間の重複、覆土の状態を観察しながら柱穴を掘り下げた。尚焼土等は半截しセクション図作成後掘り下げ土壌のサンプリングを行なった。遺物取り上げはI・II層は4m×4mのグリッドを4分割した2m×2m毎の一括取り上げ、遺構面であるIII層は実測図作成後レベルを附して取り上げた。

7月　調査区内4m×4mグリッド設定。柵列跡周辺表土除去。遺構確認作業、焼土、柵列、柱穴検出。

8月　柵列跡周辺調査。同柱穴配置略図作成。同平面図作成。段急傾斜面表土除去、旧道跡周辺表土除去。

9月　旧道跡調査。旧道跡検出。階段状遺構検出空壕跡周辺表土除去。

10月　空壕跡周辺調査。空壕A・B検出、土壙1、2、3検出。

11月　建物跡周辺表土剝ぎ。空壕跡実測。写真撮影建物跡周辺調査。同柱穴配置略図作成。

12月　建物跡周辺調査。全調査区写真撮影。建物跡周辺、柵列地区埋め戻し。終了。（斉藤邦典）

2．基本層序

I層　表土。10YR3/3暗褐～10YR4/4褐シルト。草根多量。やや密。

II層　館廃絶後の自然堆積層。10YR3/3暗褐～10YR4/4褐シルト。やや密。炭化物。OS－a混入細分される。OS－a純層も含まれる。

III層　館機能時の整地盛土層。10YR4/4褐～10YR5/6黄褐。密。ソフトローム粒、炭化物、基盤礫等含有する。細分される。

III′A層　空壕A覆土。10YR4/3にぶい黄褐～10YR5/6黄褐シルトと基盤砂礫の混層。基盤砂礫純層も含まれる。やや粗。

III B′層　空壕B覆土。10YR5/4にぶい黄褐～10YR5/6黄褐シルトと基盤砂礫、ロームブロックの混層。密。堅致～やや粗。

IVa層　縄文期以後より館が機能する直前までの自然堆積層。黒。シルト～7.5YR3/3暗褐シルト。

IVb層　10YR6/6明黄褐火山灰。やや密。

IVc層　縄文期包含層。10YR4/6褐シルト。やや丁層。10YR5/4にぶい黄褐～10YR5/6黄褐。ソフトローム。

3．環境整備

今年度は今年度調査区内の段急傾斜面、空壕A・Bの芝張1203m²、8号地割面掘立柱建物跡の平面表示を行った。

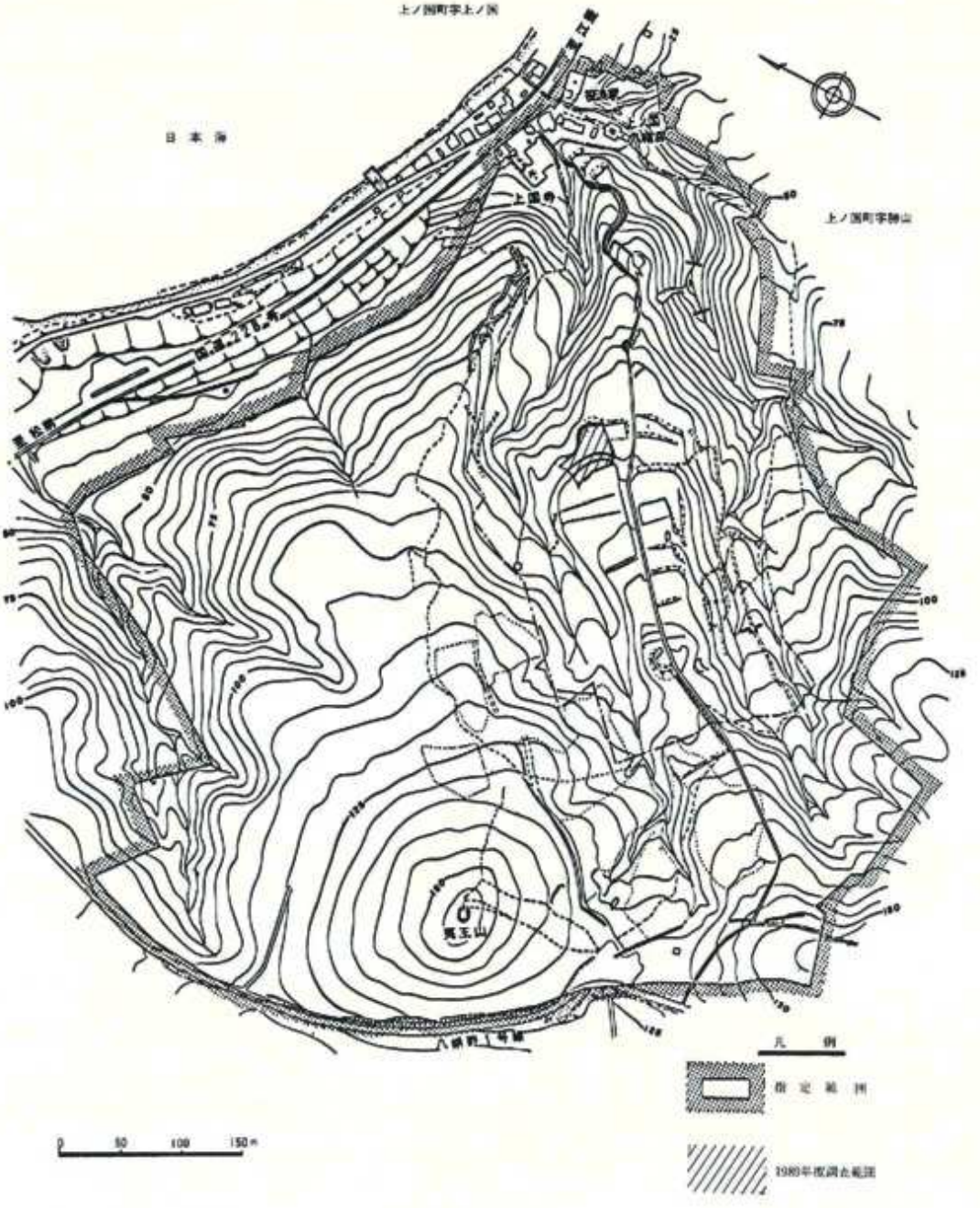
4．保存処理

昭和58年度より国の補助を得て勝山館跡出土の鉄製品、木製品、漆器の処理を行っている。今年度は鉄製品1600点、木製品は640点をエタノールによる表面処理を行なった。（斉藤邦典）

II　遺構確認調査

1．目　　的

昨年度大手空壕地区北側にて東西にトレンチを設定し掘り下げた。その結果昨年度調査区である大手空壕地区南側と同様に空壕A・Bが確認された。これにより空壕A・Bが南北に伸び、大手空壕地区を南北に横断する事が確認された。また空壕B外側に平担部があり昨年度同様建物跡の存在が予想された。これらの事より今年度は空壕A・Bの規模、平担部建物跡の調査、さらに段上柵列及びその内側の附属施設の検出を目的とした。


上ノ国町字上ノ国
日本海
上ノ国町字勝山
上国寺
八幡宮
勝山館
黄金山
凡例
指定範囲
1980年度調査範囲
0
50
100
150m

第1図　調査位置図

2．検出遺構と遺物

1　柵列跡

(1)位置・概要（第２図）

勝山館主体部は寺の沢と宮の沢に挟まれた台地上にある。この台地は大きな三段の平担面より作られている。そのうち一段目と二段目の平担面との落差は５ｍ余りあり、約40°の急斜面となる。この二段目平担面端部より昨年度同様、柵列跡、柱穴群等が検出された。

(2)層序（第２図）

図によると柵列溝は約80cm程の盛土整地層であるⅢ層よりの掘りこみである。SP K～K′では３条の柵列溝が観察される。これによると中央の柵列溝と内側の柵列溝が重複しており内側が新しい。また外側の溝とは重複関係にないが平面図で見る限り16K１区では中央の溝に切られており最も古い。

(3)規模・附属施設等

柵列は昨年同様台地肩部分にて検出された。調査区内南側16K１区附近では３条、中央部16L４区附近も３条、16L１区附近ではさらに外側に２～３条程浅い溝と小ピットが検出されたが、他の３条と比べても柵列の溝といえる程しっかりしたものではない。これらより柵列溝は３条と考えられそれぞれ時代差をもつと思われる。さて柵列の内側では多数の柱穴が検出され柵列に伴なう附属施設が予想された。施設[n1]としては柵列の内側の控柱が検出された。図上P132、P225、P90、P211、P29等がそれに当たる。いずれも柵列に対してほぼ直角となり、柵列との距離は１ｍ程となる。図上P225、P56、P119、P46は建物跡と考えられる。

(4)焼土（第３図～第５図、表２）

10基確認された。調査はいずれも半載しセクション図作成後覆土をサンプリングした。

焼土１（第４図 SPA～SPA′）

昭和55年度調査の際のトレンチにより半分程破壊されている。残存部は１ｍ程の半円状をなす。第４図覆土のは木炭と熱を受けて赤褐色となっている粘土塊の混層である。覆土中の成分は粘土塊木炭が主体をなし、陶磁器片、鉄製品破片、３mm大のスラッグ、土器片、フレーク等が含まれる。

焼土２（第４図 SPB～SPB′）

55cm×38程の不整形をなす。覆土中の成分は木炭、獣魚骨が主体をなし、スラッグ、鉄製品破片土器片、フレーク等が含まれる。

焼土３（第４図 SPC～C′）

３基の焼土が重複している。古い方より40cm×50cm、55cm×55cm、52cm×60cmのそれぞれ不整形をなす。覆土中の成分は獣魚骨、鉄製品破片、鍛造剥片、木炭が主体をなし、陶磁器片、スラッグ種子等が含まれる。

焼土４（第４図 SPD～D′）

52cm×45cm程の不整形をなす。覆土中の成分は粘土塊、鉄製品破片、鍛造剥片、粒状滓、スラッグが主体をなす。他に陶磁器破片、獣魚骨等である。特にスラッグは５cm×２cm～１cm×１cm程のもので中には陶器片が混入しているものや、鉄製品にスラッグが附着しているものも見られた。

焼土５（第５図 SPE～E′）

調査区外南西に伸びているため全体はつかめず推定直径50cmの不整円形。覆土中の成分は粘土塊が主体をなす。他に木炭、スラッグ、種子等である。

焼土６（第５図 SPF～F′）

65cm×55cmの不整円形、覆土中の成分は粘土塊、木炭、種子、陶磁器破片が主体をなす他にスラッグ、鍛造剥片、獣魚骨等が見られる。第５図覆土２は粘土塊純層である。

焼土７（第５図 SPG～SPG′）

30cm×25cmの不整円形をなす。覆土中の成分は木炭、獣魚骨である。

焼土８（第５図 SPH～SPH′）

３基の焼土が重複している。古い方より残存部60cm×70cm、30cm×40cm、30cm×35cm程である。覆土中の成分は木炭が主体をなし他は微量である。

焼土９（第５図 SPI～SPI′）

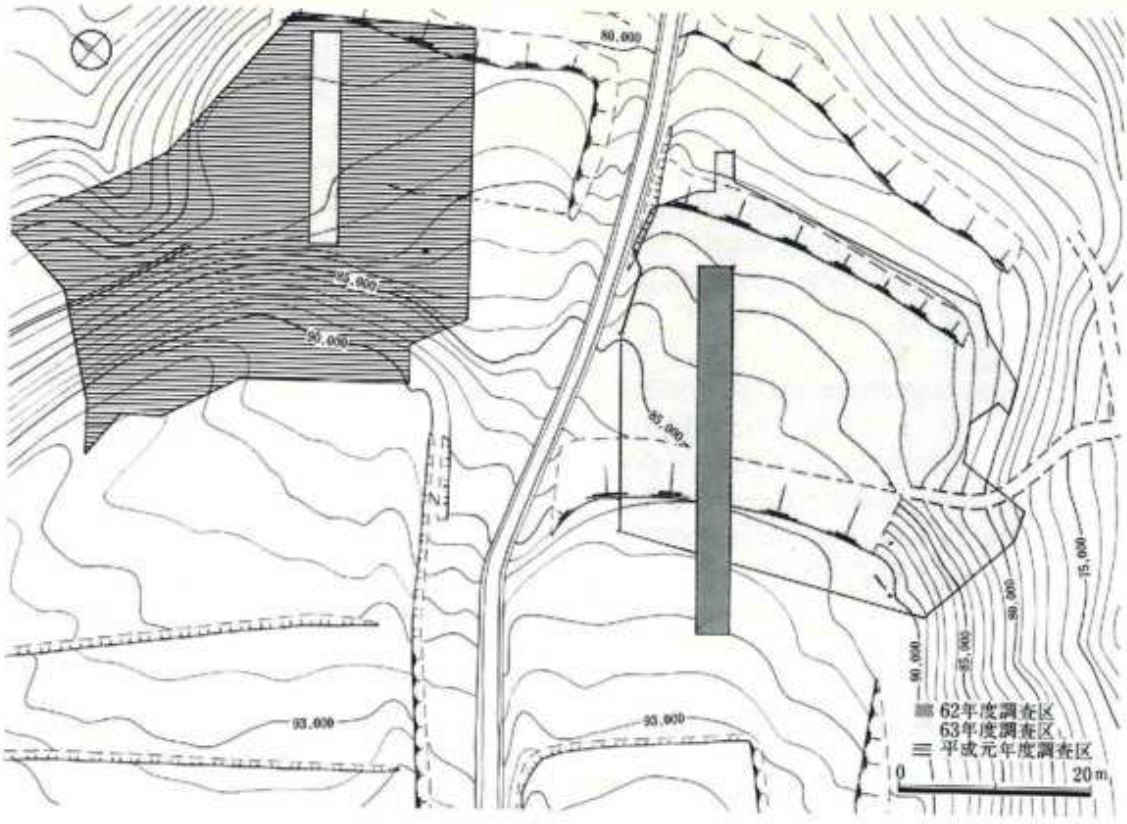
70cm×70cmの不整円形を呈する。覆土中の成分は粘土塊、木炭の他は微量である。第５図覆土１は粘土塊純層である。

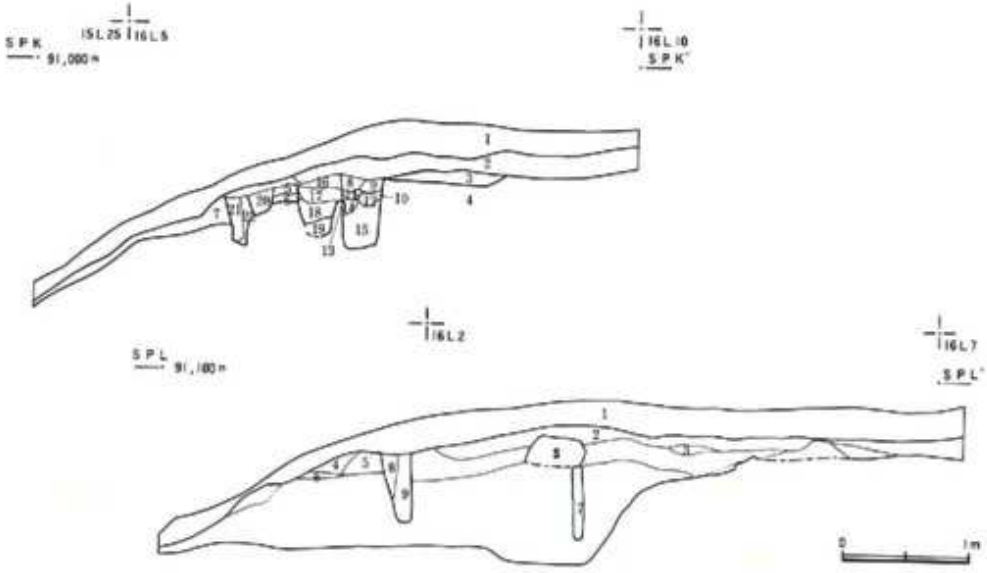
焼土10（第５図 SPJ～SPJ′）

65cm×20cmの不整円形をなす。覆土中の成分は粘土塊、木炭の他は微量である。

(5)出土遺物（第６図、７図、PL10、11、17、18）

陶磁器、青磁、白磁、染付、唐津、美濃、志野の碗、皿、越前等の擂鉢が出土している。[n2]





第２図　調査区位置図・棚列跡土層推積図

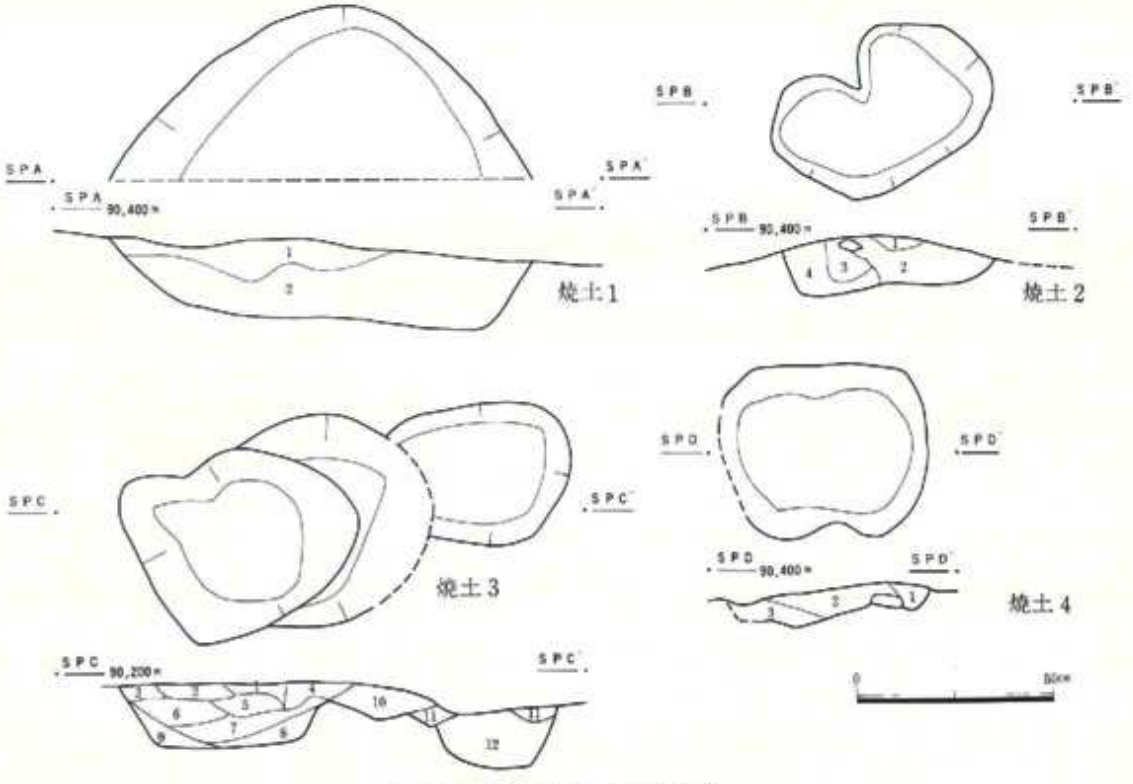
第3図　棚列跡平面図

表1　15L25～16L10区土層観察表

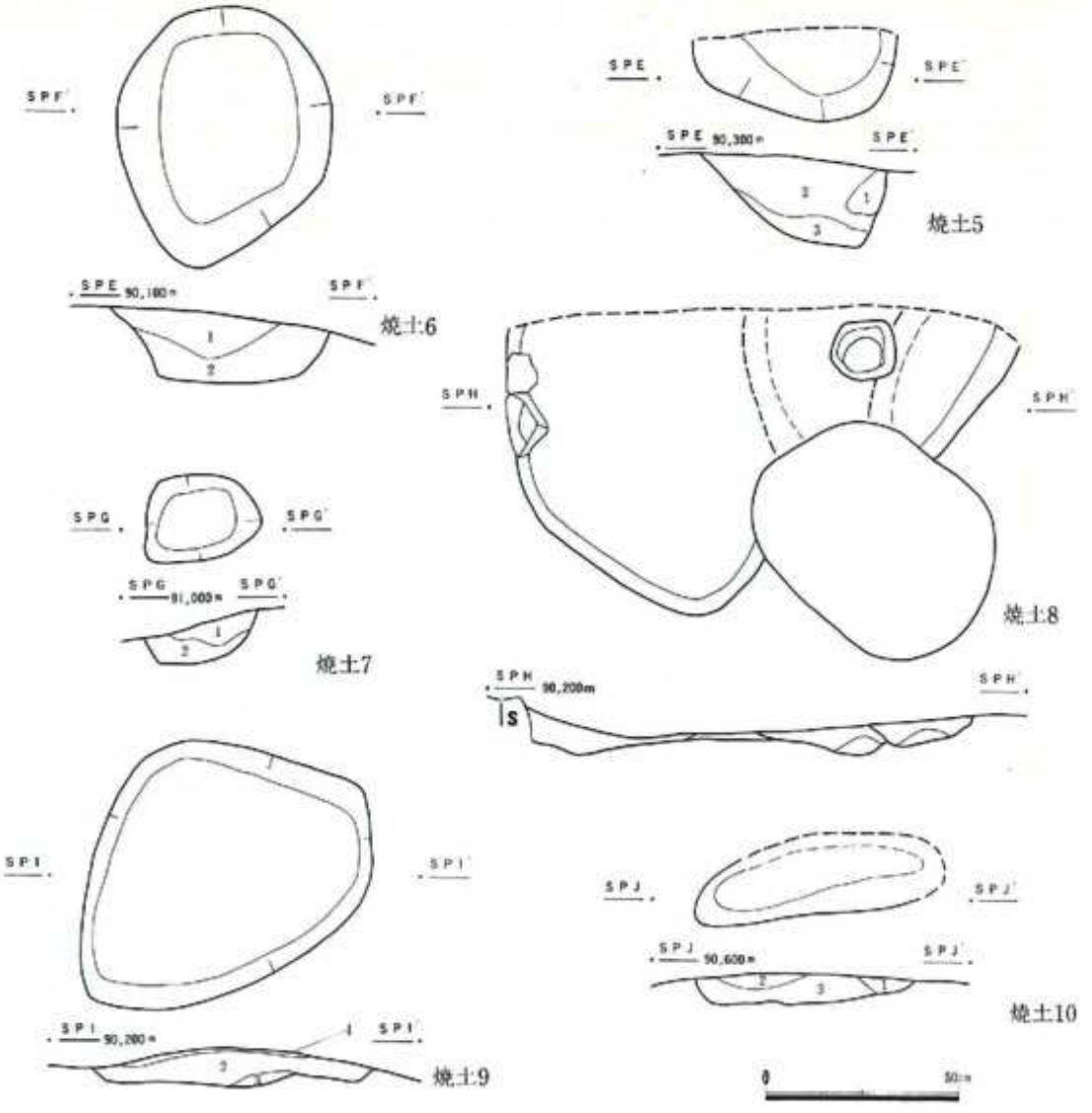
図版番号	層序 基本層序	小区分	細別	色調 JIS notation	土色	土性	組成	備考	
1	I			10YR4/4	褐	シルト		やや粗	
2	II			10YR4/3	にぶい黄褐	シルト		やや粗	
3	III		1	10YR4/3		シルト	黒花崗 アロ・ク10～15% 3%	やや密	
4	III		2				ローム質土 平炭	密	
5	III		3	10YR2/3	黒褐	シルト	細土粒アロ・ク中大1～輪大3% 炭化物 8%	やや粗	
6	III		4	10YR6/6	明黄褐		炭化物 2% 骨粉 2%	やや密	
7	III		5	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	ローム・ブロ・ク10%		
8				10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	骨粉 1% 焼土粒・ブロ・ク細大1.5%、ローム粒・ブロ・ク細大1～11%		榛列覆土
9				10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	焼土粒・ブロ・ク 1%	やや粗	榛列覆土
10				10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	炭化物 1%	やや密	榛列覆土
11				10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	白色ローム 1% 焼土粒 0.5%	やや密	榛列覆土
12				10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	白色ローム・ブロ・ク3% 焼土粒 1%	やや粗	榛列覆土
13				10YR4/3	にぶい黄褐	シルト		やや密	榛列覆土
14				10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	焼土粒 0.5% ローム・ブロ・ク1%		榛列覆土
15				10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	ローム・ブロ・ク～20%	粗	榛列覆土
16				10YR4/4	褐	シルト		やや粗	榛列覆土
17				10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	焼土粒 1% 炭化物小塊1%(細～小粒)～小粒1	やや密	榛列覆土
18				10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	ローム・ブロ・ク1% 炭化物 2%		榛列覆土
19				10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	ローム・ブロ・ク3% 焼土粒 1% 炭化物(小粒～中粒) 3%	やや密	榛列覆土
20				10YR5/3	にぶい黄褐		焼土粒(小粒～中粒) 1% 炭化物 1%	やや密	榛列覆土
21				10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	ローム・ブロ・ク3% 炭化物 1%		榛列覆土
22				10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	ローム・ブロ・ク10%	やや密	

16L 2・7区土層観察表

図版番号	層序 基本層序	小区分	細別	色調 JIS notation	土色	土性	組成	備考
1	I			10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	平炭	密
2	II			10YR4/4	褐	シルト		
3	III		1	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	10YR6/6明黄褐 ローム・ブロ・ク 3%	やや粗
4	III		2	10YR4/4	褐		炭化物 3% ローム・ブロ・ク 1%	やや粗
5	III		3	10YR4/4	褐	シルト	ローム・ブロ・ク20% 炭化物 3%	やや密
6	III		4	10YR4/4	褐		ローム・ブロ・ク 炭化物含有量	
7				10YR4/4	褐	シルト		やや粗 ピット覆土
8				10YR4/3	にぶい黄褐		ローム・ブロ・ク 1%	やや粗
9				10YR4/4	褐	シルト	炭化物 2%	粗



第4図　焼土平面・土層堆積図



第5図　焼土平面・土層堆積図

表2　焼土成分表

		サンプル	成						分(g)				
焼土No.	グリット	総量(g)	木炭	種　子	植物(炭化)	骨	鉄鍛	鉄分	スラッグ	鍛造剥片	砂鉄	陶磁器	
1	16L.3	20360	31.6	4.6		1.9	4.5		8.7		4.3	9.1	土器32.7フレーク441
2	15L.24	12270	17.0			6.8	1.3		2.3				土器46.2フレーク 8.2
3	16L.4	73030	9.0	0.9		18.6	13.4	0.8	1.3	11.1	15.7	7.1	土器54.6フレーク14.2
4	16L.5	114640	14.4	0.9		1.7	24.9	12.0	256.0	21.0	7.6	1.6	粘土塊2180 土器73 フレーク3.3 松状津11.8
5	16L.5	26340	20.5	2.1		1.1			3.8		4.9		粘土塊1640 土器77.4フレーク4.0
6	16L.5	27150	46.1	37.3		2.7	31.6		2.1	1.8	6.2	25.2	粘土塊6085 土器168.9 フレーク8.8 礫石,石製品11.8
7	16L.5	5960	5.4			2.7					3.1		土器25.3フレーク1.6石製品30.3
8	16K.1	38300	35.9	5.5		1.8	1.3		3.8		14.3		土器5.8フレーク5.2 粘土塊
9	16K.1	14930	6.0	1.0		1.0			0.9		6.8		粘土塊
10	15L.22	4550	9.6			1.4			1.1				土器9.9 粘土塊

表3　焼土土層観察表

焼土No.	グリット	色調			土性	組成	備考
		層序No.	JIS notation	土色			
焼土1	16L3	1	10YR4/3	にぶい黄褐		1cm大焼土礫 1cm大炭化物 混合層	やや粗
		2					
焼土2	15L24	1	7.5YR4/4	褐		焼土粒が混る	
		2	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	2.5YR5/8明赤褐焼土　10% ロームブロック2%	やや粗
		3	10YR4/31	にぶい黄褐	シルト	焼土　10%	やや密
		4	10YR4/4	褐		炭化物　2%	やや粗
焼土3	16L4	1	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	焼土粒　3%　微小砂礫　5% ロームブロック2%　白色粉　5%	やや粗
		2	10YR4/4	褐	シルト	炭化化　10% 焼土粒　3%	やや粗
		3	10YR4/4	褐	シルト	焼土粒　1% 炭化物　1%	密
		4	10YR3/3	暗褐			
		5	7.5YR5/6+10YR3/3	明褐+暗褐	シルト	焼土粒　1% 炭化物　2%	やや粗
		6	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	焼土粒(微粒子) 炭化物　1%　堅致	密
		7	10YR4/4	褐	シルト	白色粒　2% 焼土粒(微粒子)混	やや粗
		8	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	微粒子、焼土粒混	やや粗
		9					
		10	2.5YR5/8	明赤褐		焼土純層	
		11	7.5YR4/4	褐			やや粗
		12	7.5YR3/2	黒褐		微粒子、焼土粒が混る 中焼粒入る	やや粗
焼土4	16L5	1	7.5YR4/6+10YR4/4	褐+褐		焼土粒　混層 炭化物　5%	やや粗
		2	10YR4/4	褐	シルト	ロームブロック　3% 炭化物　15%	やや粗
		3				ロームブロック　1%	
焼土5	16L5	1	10YR4/4	褐	シルト	焼土粉　10%	やや密
		2	10YR3/3	暗褐	シルト	粘土　40%　粘土　40% 焼土礫　40%	やや密
		3				焼土礫層　堅致	やや密
焼土6	16L5	1					
		2				焼土礫層2cm大 炭化物　3%　堅致	やや粗
焼土7	16L5	1	2.5YR5/8	明赤褐		焼土純層	やや粗
		2	7.5YR4/4～4/6	褐		10YR4/4+焼土混層	やや粗
焼土8	16K1	1	2.5YR5/8+7.5YR4/4	明赤褐+褐	シルト	焼土礫 白粉炭化物 5%混入	密
		2				ロームブロック+焼土粉	
		3	7.5YR4/4	褐	シルト	焼土粉 炭化物　3%　白粉　3%	やや密
		4	10YR4/3赤味	にぶい黄褐		ロームブロック　10% 焼土粒　堅致	密
		5	10YR3/2	黒褐	シルト	炭化物　3%　焼土粒　10%	粗
焼土9	16K1	1				焼土礫層 炭化物　10%	
		2	10YR4/3	にぶい黄褐		焼土粒　5% 炭化物　1%	やや粗
		3				ロームブロック層	
焼土10	15L22	1				焼土純層	
		2	7.5YR4/4			焼土粒　10%	
		3	10YR4/4	褐		焼土ブロック礫	やや密

青磁　PL10－1は直口縁無文の碗で体部がやや張る。内面見込みには印花がある。胎土は灰色を呈し、釉調は暗オリーブ色を呈する。口縁下には横線が描かれる。高台裏は露胎である。その他直口縁蓮弁文の碗、稜花皿等が見られる。

白磁　PL10－17は外面に雷文の省略形を施した碗である。口唇が肉厚である。PL10－43は底部より一気に外反する皿である。

染付　第6図1は内湾する皿で内面口縁に四方襷文、見込みは山水人物が描かれる。外面は口縁部に圏線、胴部に折枝文、高台脇には2条の圏線が描かれる。高台内には2重の圏線で囲まれて大明年造が描かれる。(PL10－52)。第6図2(PL10－53)は端反りの皿で内面口縁に圏線、見込みには草花文が描かれる。外面は牡丹唐草が描かれる。畳付、高台内は露胎である。骨付きは面取りがされる。その他碁筒底の皿で見込みに吉祥文が描かれるもの等がある。

美濃・唐津・志野（第10図、PL10～11）

美濃、灰釉でPL11－2の折縁菊皿、PL11－23の鉄釉の碗でやや外開き気味で高台が小さく、口唇は薄く直線的である。高台、畳付きも施釉される。その他第6図6（PL 6）の鉄釉の碗で口唇が厚く括れが小さく、直立に近いもので釉調は茶色味が強いもの等がある。

唐津　皿ではPL11－9、第6図3を初めとして灰釉で見込みに胎土目積の重ね焼痕がある。重ね焼痕は3つのものと4つのものがある。いずれも胴部下半より下は露胎である。

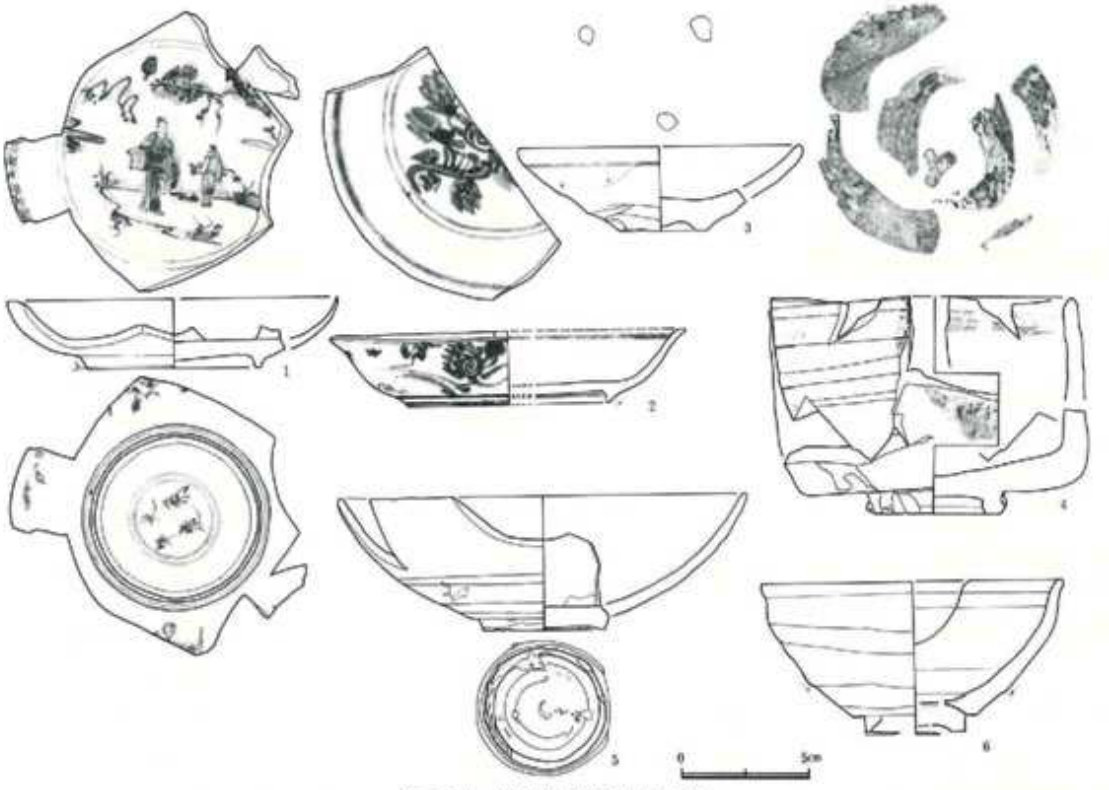
志野　第6図4（PL10－33）の筒形碗がある。極めて肉厚である。内面には鉄釉で巴文が描かれる。高台は小さい、畳付以下露胎、胎土はやや荒い。

擂鉢（第7図7～13、PL14、15）

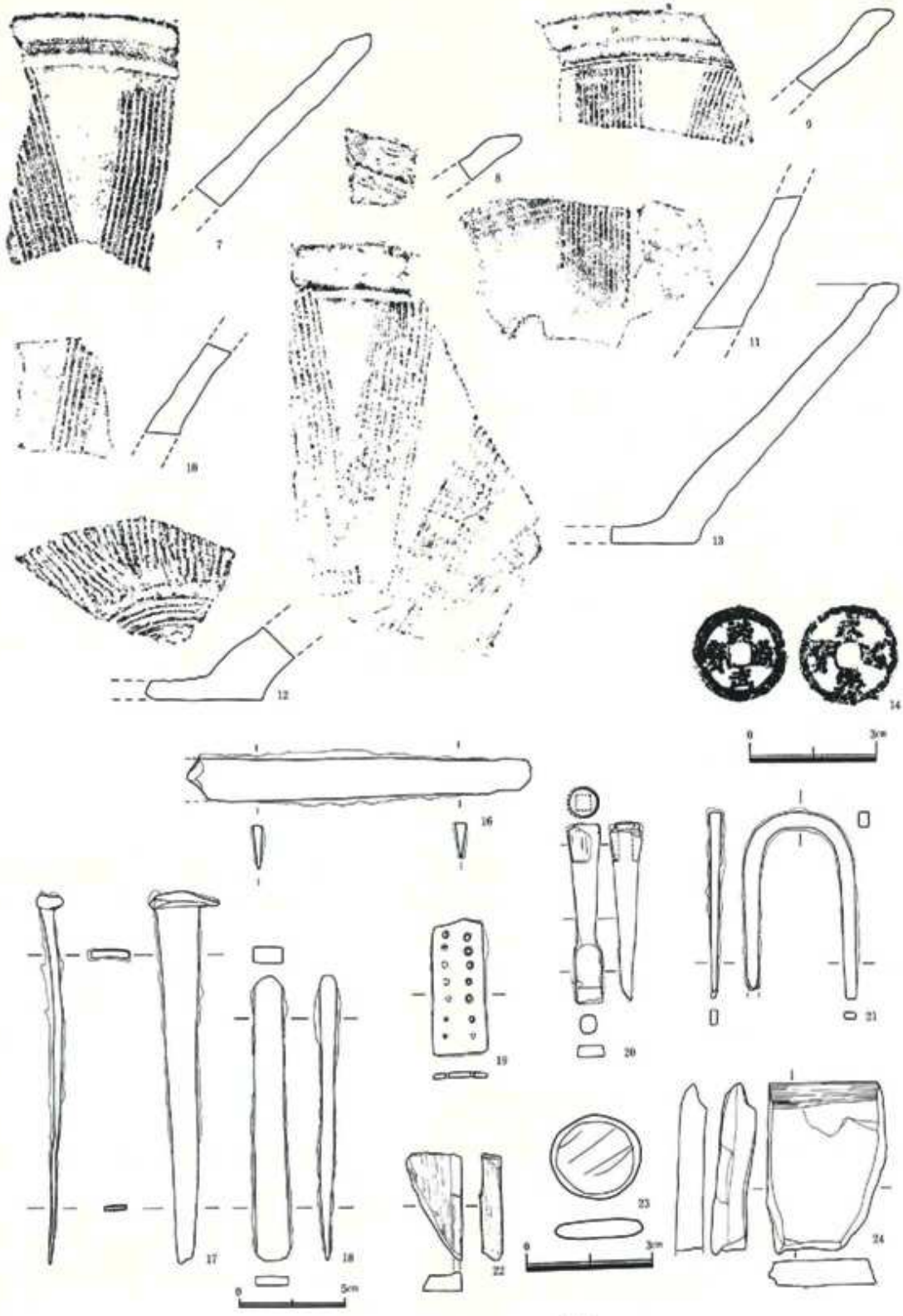
図上では8を除き越前系のものである。8は珠洲系と思われる。越前系では口唇が内削ぎ気味でほぼ水平をなし、口縁直下に凹線があるもの等がある。

鉄製品（第7図16～21、PL17－8～13）

第7図16は小刀である。下端部が刃部となる。第7図17は和釘である。残存長17.5cm、厚さ3 mm程の偏平な形状を呈する。頭部の折りこみも少なくさっぱ釘の一種と考えられる。第7図18は断面が偏平なもので下部にいくに従い薄くなる。平面



第6図　棚列跡周辺出土遺物



第７図　柵列跡周辺出土遺物

形では下部にいく程幅広となる。そして下端部は隅が角張らず丸味を帯びる。錆の附着は著しいがさほど銹化は進んでいない。工具の一種と考えられる。第7図19は小札である。第7図20は断面形が上端より中央部にかけて円形を呈し、下半部は台形状となる。平面形では図のように上部は表面は鉄であるがすぐその内側に厚さ2 mm～1 mm程の木がはめこまれており、さらにその内側はまた鉄となる。乃ち鉄と鉄の内に木がはめこまれている形となる。尚木質部は観察できる範囲内では上端部より下にいくに従い薄くなる。下部は銹化が著しい最下部は刃部と思われる鋭角な部分が存在する。ノミ状の工具と考えられる。21は断面長方形の偏平なものである。用途不明。

銭（第17図13、14）

13は洪武通宝、14は永楽通宝である。14は16L 5区焼土6覆土よりの出土である。

銅製品（PL18－32～34、38、39、41、42）

32は上半部はハート形の文様が透かしで入っており、胴部には径1 m程の円形の透かし模様が無数に入る。そして写真に見られるように胴部下半より内部へ鋲が1本打たれる。内部に入っている鋲の先端には鋭角な鋸歯状の縁辺もつ円形のものが2本つく。用途不明。33は先端が二又に分かれる鋲である。34は上半部円を描く箇所の断面は円形不半部は長方形をなす。下部は二又はわかれる。38は銭が溶解したもので緑青が発生している。39は上部よりの写真である。上端はゆるく湾曲する。下部及び左側は欠損している。全体として内側に湾曲し蓋状となる。側面より見ると下部には幅5 mm程のつまみ状のものが左端～右端へ一本でつながっており、右側には径1 cmの穴があけられる2cm程の高さをもつ。42は厚さ1 mm程の銅板を折り曲げたものである。内部には鉄錆が附着する。

石製品（第7図22～24、PL17－38、43、52、56、57PL18－1、2、6、7、13、14）

硯（第7図22、PL18－1、2）

第7図22（PL18－1）は擦面及び提右側面にやや荒い擦痕多数有、砥石としての再利用が考えられる。石の色はグレイみの緑である。PL18－2は表面及び提の部分は剥離された状態となっている。石の色は灰色である。

碁石（第7図23、PL18－7）　黒色を呈し表面はつるつるしている。

砥石（第7図24、PL17－38、43、52、56、57、PL18、13、14）

第7図24（PL18－13）は上端部表裏に研ぎ面がある。そのため最上部は薄くなっている。研ぎ面の擦痕はやや荒い。PL17－38は4面に研ぎ面がある。擦痕は上下側面がやや荒い。石質は他に比し粒子が荒く、重い。断面は長方形を呈する。長さ6.5cm、横幅4.2cm、厚さ2 cm程である。PL17－43は研ぎ面が下側面及び上側面にある。研ぎ面の擦痕は細かくやや緻細である。板状剥片である。PL17－52は表裏面2面を主な研ぎ面としている。左右下隅側面にもわずかな研ぎ面が見られる。表面は細かな擦痕が斜行する。裏面及び左右下隅側面は肉眼で擦痕が観察出来ない程緻細であり、表面がつるつるした状態である。断面形は板状である。長さ5.5cm、幅3.4cm、厚さ7 mm程である。PL17－56は上面、左側面2面に研ぎ面がある。研ぎ面は緻細でつるつるした面をもつ。下面には極めて荒い幅1 mm、長さ2.5cm程の擦痕のみが5条程入る。裏面は剥離面となる。長さ5.4cm、最大幅2.3cm程である。PL17－57は表裏面2面が主な研ぎ面となる。56、52に比し研ぎ面の擦痕はやや荒く肉眼で観察出来るが表面はつるつるしている。尚表面はU字状に窪んだ状態で、左端は研ぎにより薄くなっている。尚右側面も若干荒い擦痕が入る。断面形は左端へ行い程薄くなる二等辺三角形を横にしたような形である。長さ10.5cm、最大幅5.3cm、最大厚3 cmである。

茶臼（PL18－8）

上臼である。主溝により8分割され、副溝を任意に入れる。

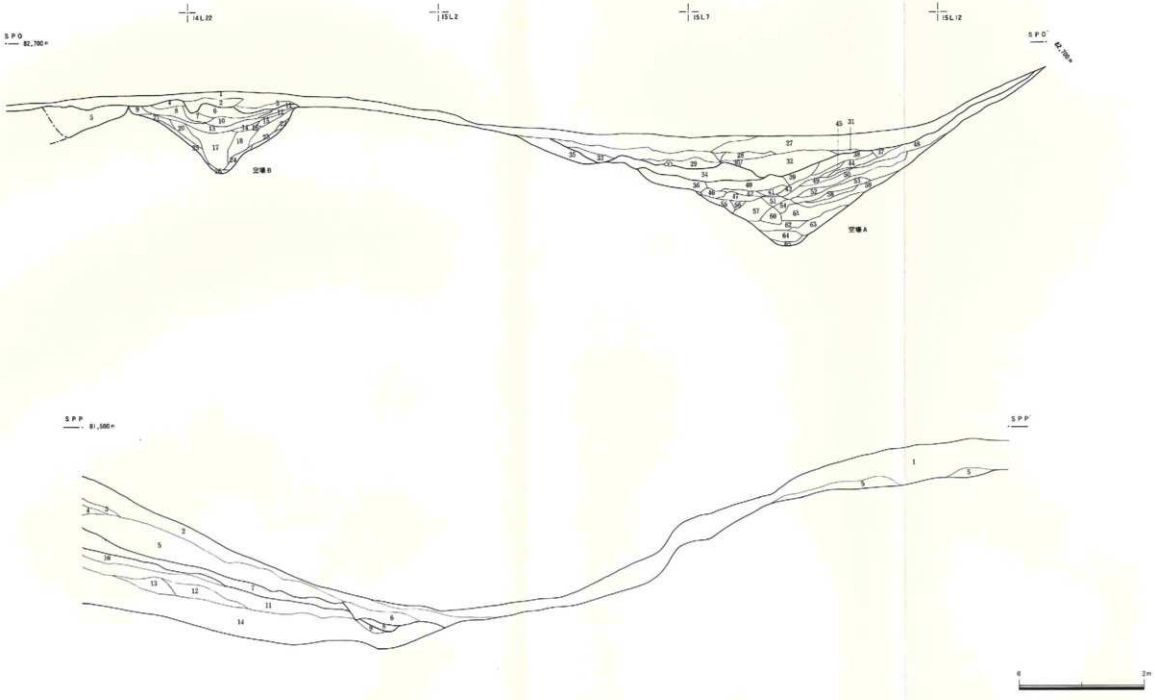
2　空壕跡

(1)位置・概要

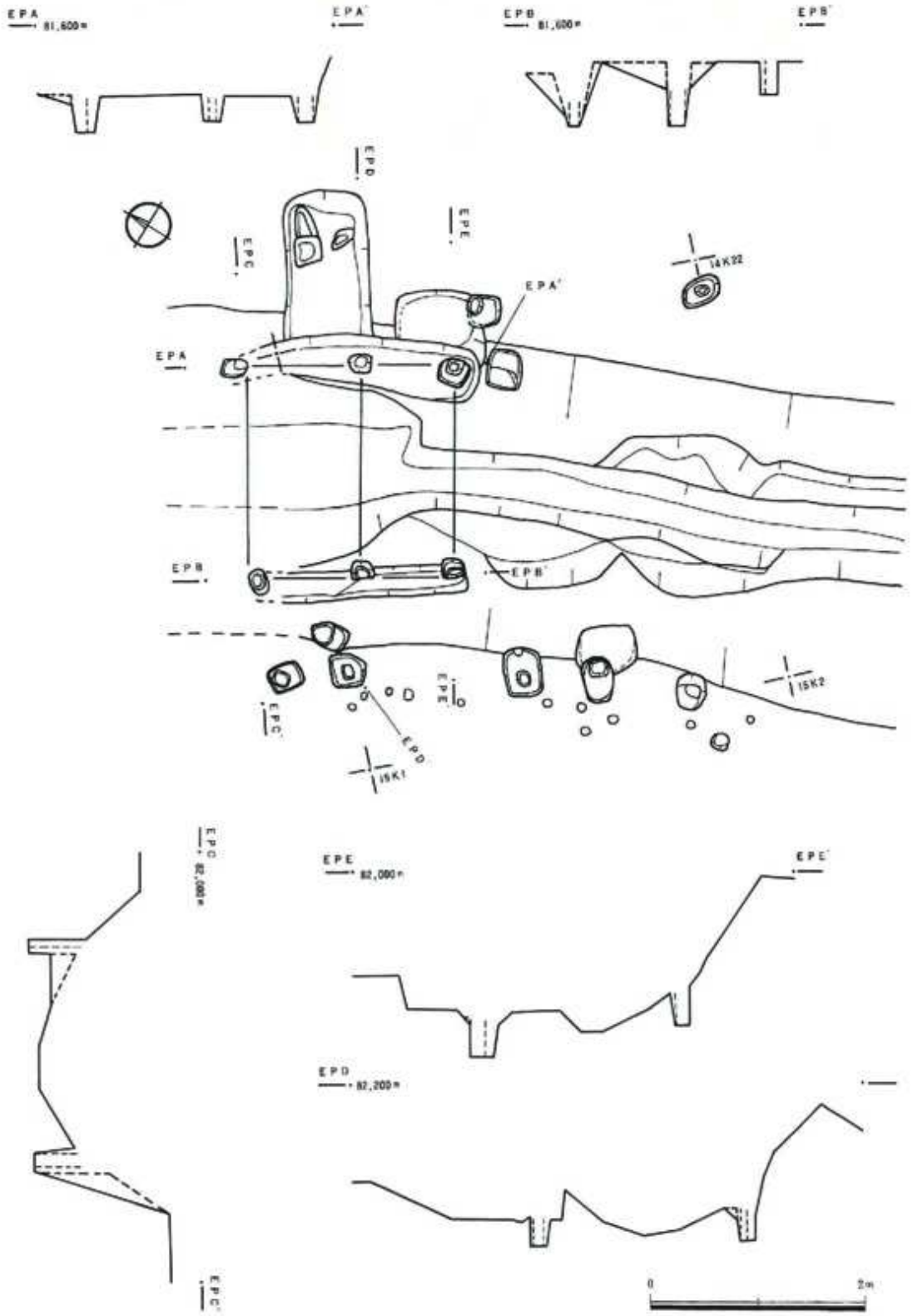
柵列跡が検出された二段目の平担面端部直下に北西～南東へ空壕が二重に掘られている。内側の空壕底と二段目端部との高低差は9 m、約40°の角度の急傾斜面となっている。二条の空壕は昨年の調査区同様に平行に掘られている。外側の空壕二附近で3基の土壙、壕を渡る橋跡[※1]等が検出された。

(2)空壕（附図）

内側の空壕Aは幅5.6m～9.2m、深さ1.4m～2.8m、延長37mで北西の小沢へ北へ曲折しながら連


14L22
15L2
15L7
15L12
SPO
82.700m
SPO'
82.700m
空壕B
空壕A
SPP
81.500m
SPP'
0
2m

第8図　空壕跡層序


EPA
81,600m
EPA'
EPB
81,600m
EPB'
EPD
EPE
EPC
EPA'
14K22
EPA
EPB
EPB'
EPC'
EPD
EPE'
15K2
15K1
EPC
82,000m
EPE
82,000m
EPE'
EPD
82,200m
EPC'
0
2m

第9図　橋跡平面図

表4　14L22～15L12区土層観察表

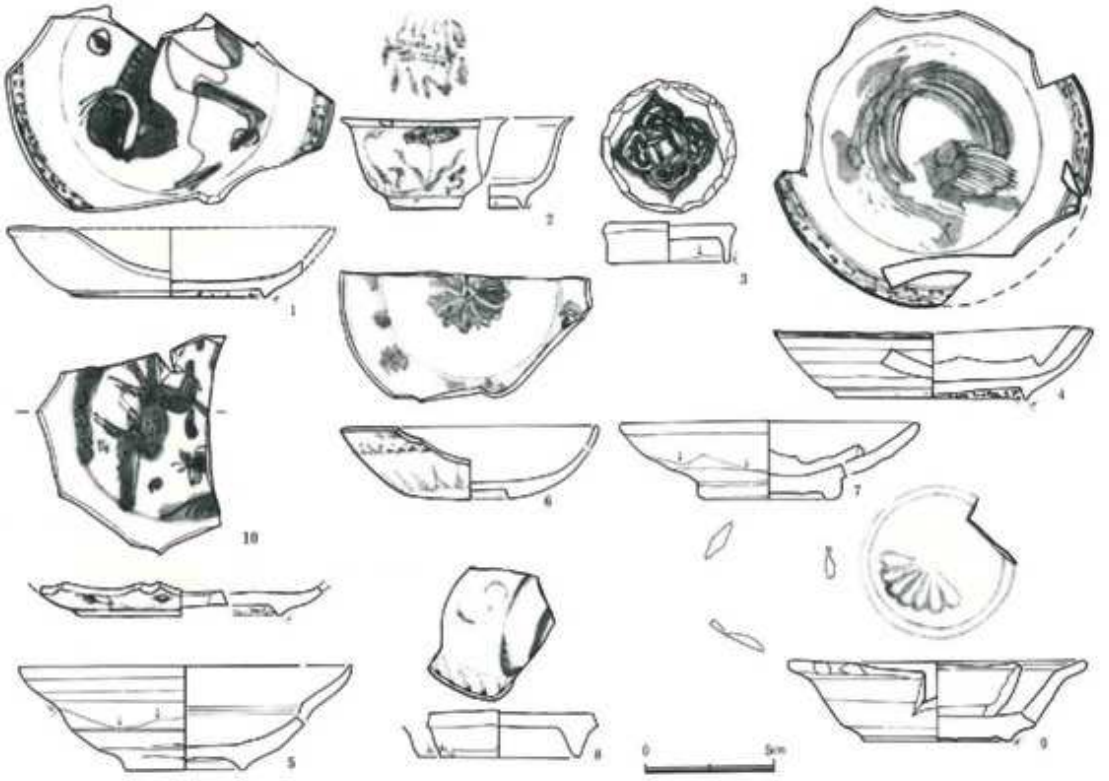
図版No. 層序No.	層序			色調		土性	組成	備考
	基本層序	小区分	細別	JIS notation	土色			
1	Ⅰ			10Y R5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極大80% 大～極大3%	やや密
2	Ⅰ		1	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト		
3	Ⅰ		2	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極大50% 黒色土ブロック混入	やや粗
4	Ⅰ		1	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤礫極小～極大1.20%	やや密
5	Ⅰ		2	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤礫中極大50%	堅り上げ赤 やや粗（黒礫B
6	Ⅰ		3	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	10Y R6/6ローム・ブロック（ベース） 基盤礫極小～極大25%	堅緻密
7	Ⅰ		4	10Y R5/4	にぶい黄褐	ローム質シルト	基盤礫10%	粗6層　6より暗い
8	Ⅰ		5	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤礫5%	やや粗
9	Ⅰ		6	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト		やや粗 8より暗干暗い
10	Ⅰ		7	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	10Y R6/6ローム・ブロック粒子多い 基盤礫18%、パラパラとくずれる	やや密 0に比し粘性弱い
11	Ⅰ		8	10Y R3/4	暗褐	シルト	基盤礫2%	やや粗(中)7に近似
12	Ⅰ		9	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	10Y R6/4ローム・ブロック（やや赤味）	やや粗
13	Ⅰ		10	10Y R4/6	褐	シルト	Ⅳa＋Ⅳbの混層	
14	Ⅱ		1	10Y R3/4	暗褐	シルト	基盤礫小2%	密、15よりやや粗い
15	Ⅱ		2	10Y R3/4	暗褐	シルト	基盤礫2%～5%	やや密
16	Ⅲ'	B	1	10Y R3/4	暗褐～にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小2%	14と15の中
17	Ⅲ'	B	2	10Y R5/6～5/4	黄褐	シルト	基盤礫極小～極大ベース60%	やや密
18	Ⅲ'	B	3	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤小～極大10%	やや密
19	Ⅲ'	B	4	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤礫5%、サラサラ	やや粗
20	Ⅲ'	B	5	10Y R5/6	黄褐		基盤砂礫	やや密
21	Ⅲ'	B	6	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤砂礫10%　基盤礫5%	やや密
22	Ⅲ'	B	7	7.5Y R5/6	明褐		サラサラ	密
23	Ⅲ'	B	8	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤礫大1～㉚ガラガラ	
24	Ⅲ'	B	9	R	基盤砂礫層		10Y R6/4シルトまじりサラサラ	
25	Ⅲ'	B	10	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極大5%	やや粗
26	Ⅲ'	B	11	10Y R3/4	暗褐	シルト	まこれたローム 基盤礫まじり5%	堅緻
27	Ⅰ		3	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小	
28	Ⅰ		4	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤礫	27に比し粗
29	Ⅰ		5	10Y R4/4	褐	シルト	基盤礫、炭化物10%	やや密
30	Ⅰ		6	10Y R4/4	褐	シルト	基盤砂礫　炭化物1%	
31	Ⅱ		1	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫混入	
32	Ⅱ		2	10Y R4/4	褐	シルト	基盤砂礫混入	
33	Ⅰ		7	10Y R5/6	黄褐			
34	Ⅱ		3	10Y R3/4	暗褐	シルト		やや密
35	Ⅲ'	A	1	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤砂礫＋基盤礫25% 基盤砂礫混れ土	
36	Ⅲ'	A	2	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト		
37	Ⅲ'	A	3	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小20%	やや密
38	Ⅲ'	A	4	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫層	
39	Ⅲ'	A	5	10Y R4/4	褐	シルト	基盤砂礫	やや粗
40	Ⅲ'	A	6	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫層極小で基盤砂礫層 砂まじり（ベース）	やや密
41	Ⅲ'	A	7	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫	やや粗
42	Ⅲ'	A	8	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫	やや粗
43	Ⅲ'	A	9	10Y R4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫　炭化物2%	やや粗
44	Ⅲ'	A	10	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫40%	
45	Ⅲ'	A	11	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤砂礫30%	やや粗
46	Ⅲ'	A	12	10Y R4/4	褐	シルト	基盤砂礫6㎝角	やや粗
47	Ⅲ'	A	13	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫	やや粗
48	Ⅲ'	A	14				基盤砂礫	やや密
49	Ⅲ'	A	15				基盤砂礫	やや密
50	Ⅲ'	A	16					やや粗
51	Ⅲ'	A	17				基盤砂礫炭化物10%	
52	Ⅲ'	A	18	10Y R5/6	黄褐	シルト	基盤砂礫	
53	Ⅲ'	A	19	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫10%	
54	Ⅲ'	A	20				基盤砂礫	やや密
55	Ⅲ'	A	21				基盤砂礫	やや粗
56	Ⅲ'	A	22	10Y R5/4～5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫	やや粗
57	Ⅲ'	A	23	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫	やや粗
58	Ⅲ'	A	24				基盤砂礫	やや粗
59	Ⅲ'	A	25				基盤砂礫	粗
60	Ⅲ'	A	26				基盤砂礫	やや密
61	Ⅲ'	A	27				基盤砂礫	やや密
62	Ⅲ'	A	28					

表4　14L22～15L22区土層観察表

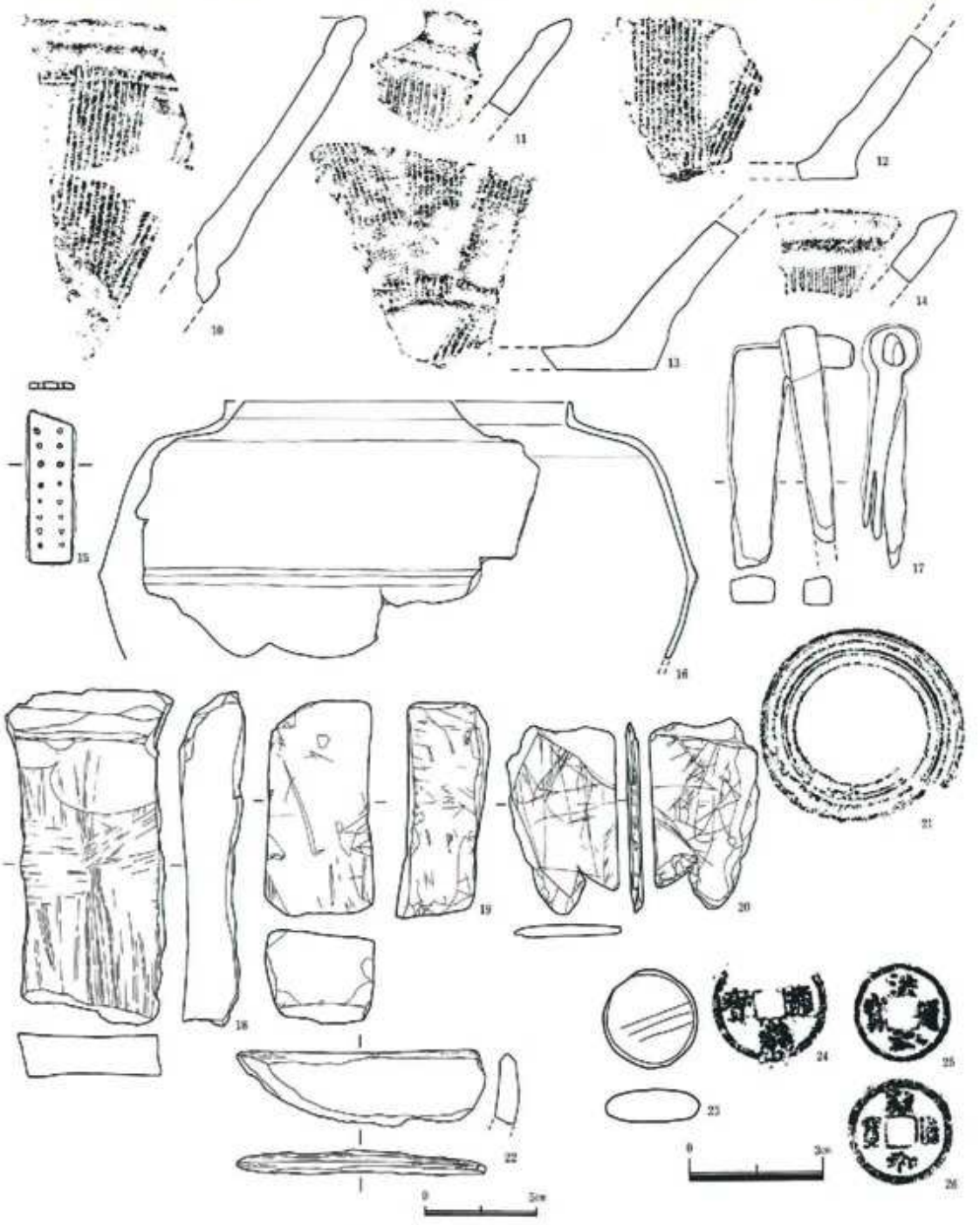
図版層序No.	層序			色調		土性	組成	備考
	基本層序	小区分	細別	JIS notation	土色			
63	Ⅲ'	A	29				基盤砂礫	やや粗
64	Ⅲ'	A	30				基盤砂礫	粗
65	Ⅲ'	A	31	10Y R5/6	黄褐	粘質土	基盤礫3％大	堅致、密

表5　空壕跡層序観察表

図版層序No.	層序			色調		土性	組成	備考
	基本層序	小区分	細別	JIS notation	土色			
1	Ⅰ			10Y R3/2	黒褐	シルト	極小基盤礫、極小玉砂利10%	やや粗
2	Ⅰ		1	10Y R5/4	にぶい黄褐	シルト	極小基盤砂礫 5%	やや密
3	Ⅰ		2	10Y R5/3～5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤砂礫 7%	やや粗
4	Ⅰ		3	10Y R4/4	褐	シルト	極小基盤砂礫 5%	やや粗
5	Ⅰ		4	10Y R5/4	にぶい黄褐	砂礫	極小～極大基盤礫	やや粗
6	Ⅰ		5	10Y R5/4	にぶい黄褐	砂礫	極小～極大基盤砂礫	粗
7	Ⅱ			10Y R3/3～3/4	暗褐	シルト	炭化物　5%	やや粗
8	Ⅱ		1	10Y R3/2～3/3	黒褐～暗褐	シルト	炭化物　5%	やや密
9	Ⅲ'	A	1	10Y R4/4	褐	シルト＋砂礫		やや粗
10	Ⅲ'	A	2	10Y R5/6	黄褐	シルト＋砂礫	砂礫　25%	やや粗
11	Ⅲ'	A	3	10Y R6/6	明黄褐	ローム＋砂礫		やや粗 極小～極大砂礫
12	Ⅲ'	A	4	10Y R6/6	明黄褐	砂礫	極小～極大基盤砂礫	やや粗
13	Ⅲ'	A	5	10Y R6/6	明黄褐	砂礫	極小～極大基盤砂礫	やや粗・粒子が大きい
14	Ⅲ'	A	6	10Y R6/6	明黄褐	砂礫	極小～極大基盤砂礫	粗



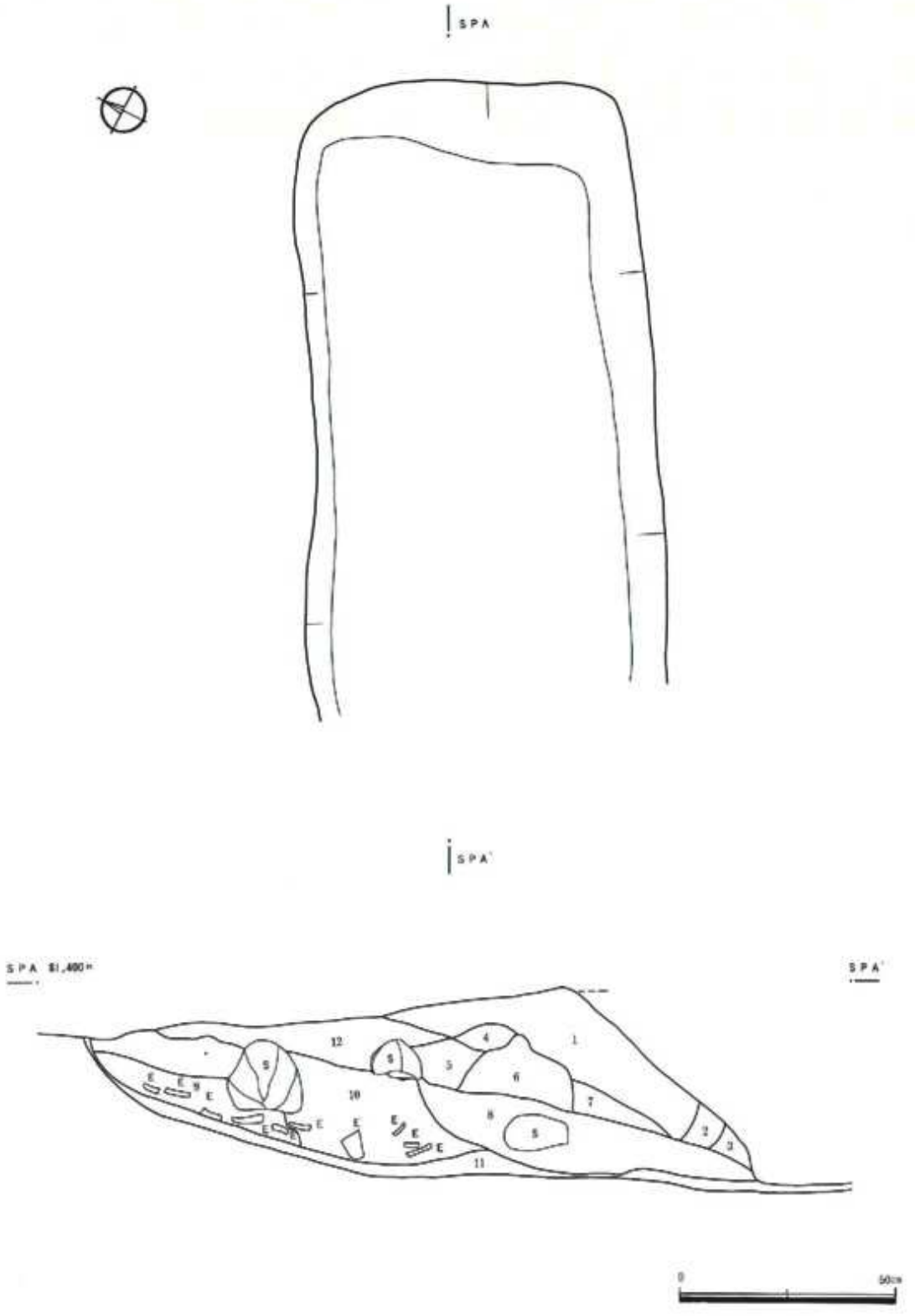
第10図　空壕跡周辺出土遺物



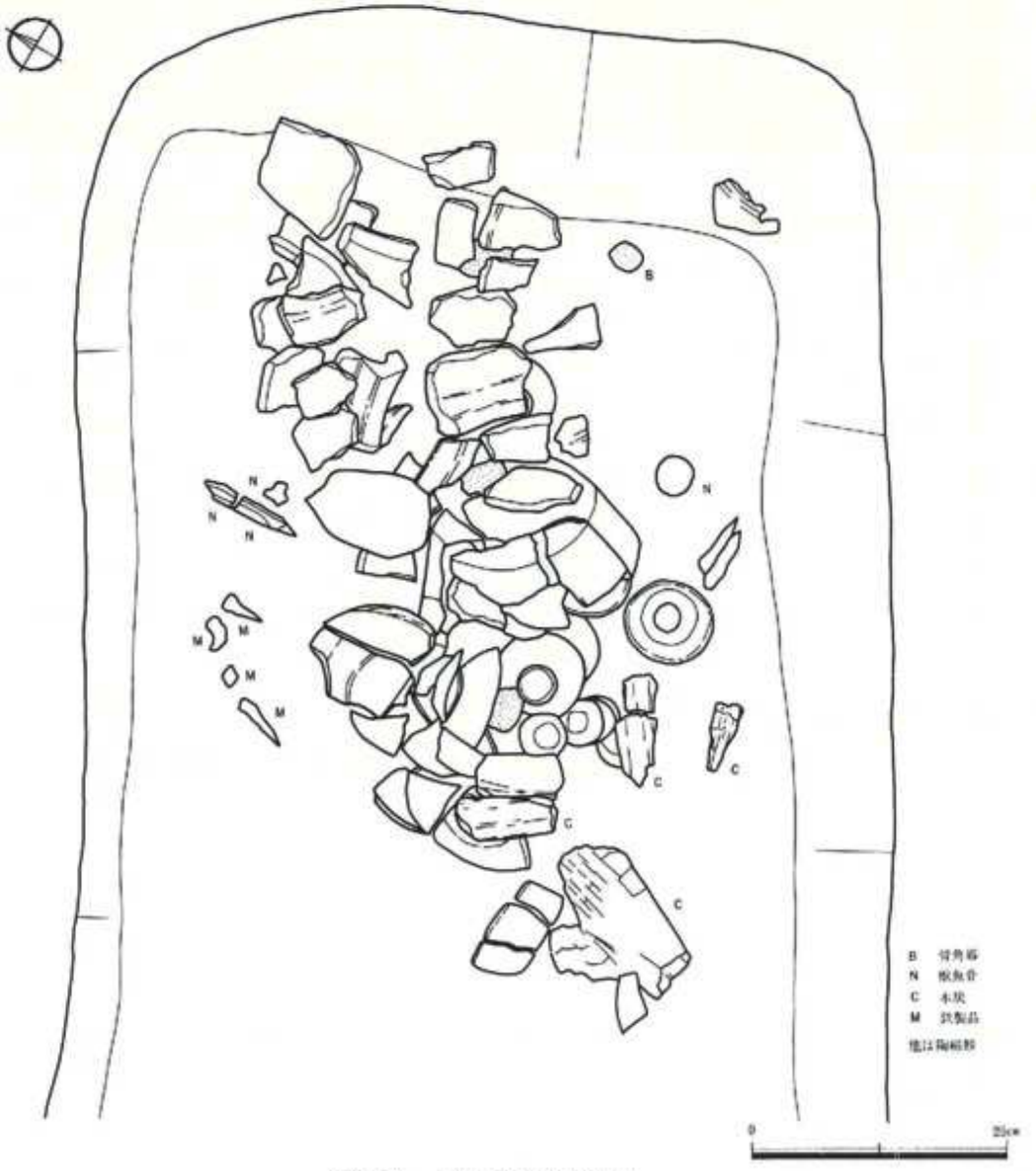
第11図　空壕跡周辺出土遺物

続する。壕底部は15L10区より32cm程の段差をもち、15L 7区以西では6～20cmの段差をもち階段状となり急傾斜となっていく。尚階段状のものは上から下へ順に掘られたようである。尚北西の小沢西壁面も20～30cm程の段差をもち人工的となっている。外側の空壕はBは幅1.5m～3.2m、深さ1 m～1.1m、延長29mで空壕Aと同様北西へ伸びて行くが北西の小沢の肩付近で幅がすぼまり、浅くなって止まる。

(3)構跡（第9図）



第12図　1号土壙平面・土層堆積図



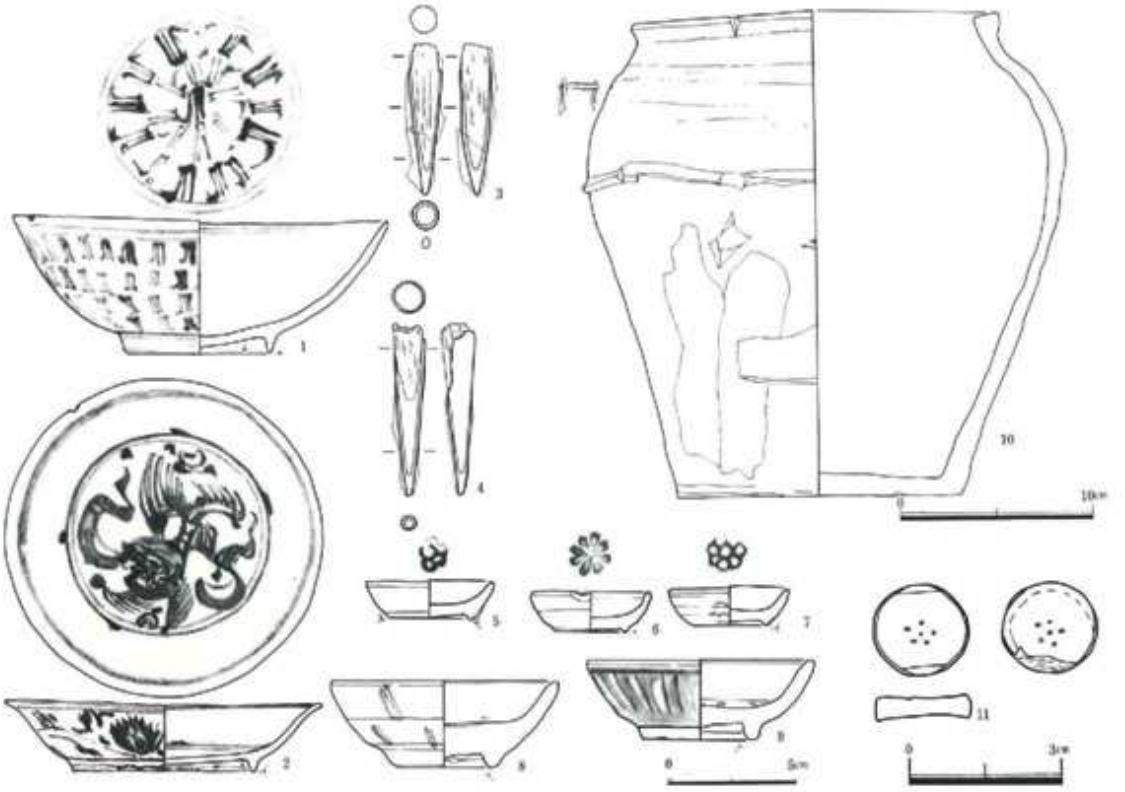
第13図　Ⅰ号土壙遺物分布図

表6　Ⅰ号土壙覆土成分表

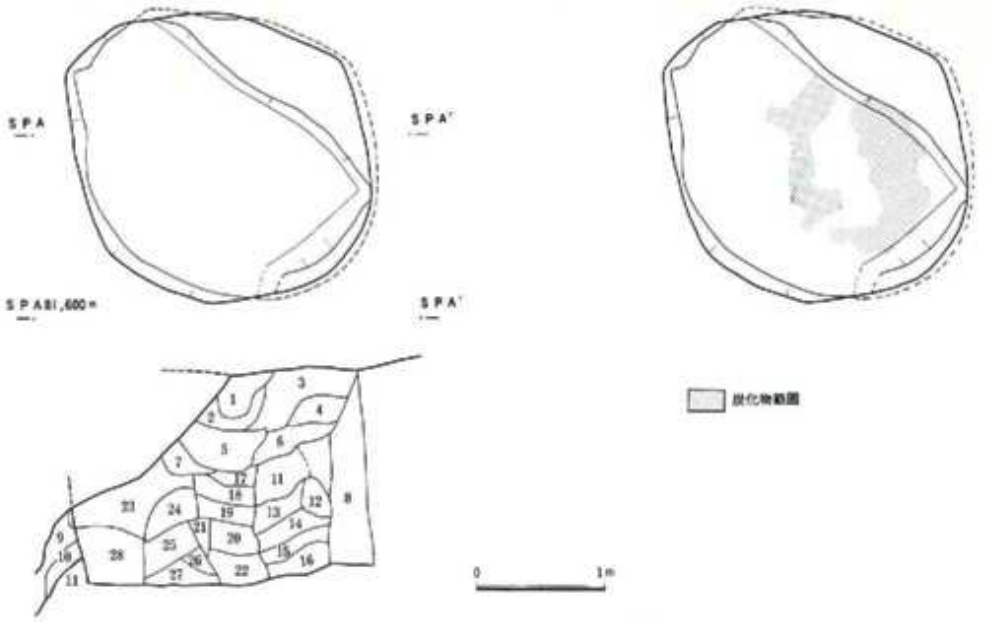
		サンプル	成						分(g)				
	グリット	総量(g)	木炭	炭化物	植物(炭化)	骨	鉄(錆)	鉄分	スラッグ	鍛造剥片	砂鉄	陶磁器	
Ⅰ号土壙E-12	14K10	240	1.3	10.5		0.9	23.3		5.3				
E-27	14K16	13		1.9	0.9	0.9			7.3				
E-29	14K16	3.5		3.5									
E-32	14K16	1 16.3	0.9	0.8					0.9				フレーク 0.8
E-35	14K16	2.9	0.9	3.0									
E-36	14K16	3.0	0.8	.1.3		0.8							
E-37	14K16	2.7											
Ⅰ号土壙フク土	14K16	81320	62.9	14.0	2.5	2.1	0.9		28.7	1.0	20.7	3.1	土器24.1フレーク 6.6
Ⅰ号土壙 覆土	14K16	62210	29.3	1.9	1.2	3.9	9.1		20.6	1.3	7.8	20.0	土器16.0フレーク31.8

表7　1号土壙覆土観察表

図版 層序 No.	色調 JIS notation	色調 土色	土性	組成	備考
1	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤礫，中　3%	やや粗
2	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤礫　5%	密
3	10YR4/3	にぶい黄褐			やや粗
4			焼土、炭化物層	ロームブロック	やや粗
5	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト		やや粗
6	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤礫　2%	やや粗
7	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	基盤礫　5%	やや密
8	10YR4/4	褐		基盤礫　1%、炭化物　2%	やや粗
9	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	焼土粒5～7%、炭化物　3%	やや粗
10	10YR4/4	褐		赤褐基盤礫　3%、炭化物　1%	やや粗
11			ロームブロック		
12	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	炭化物　2%	やや粗



第14図　1号土壙出土遺物



第15図　3号土壙平面・土層堆積図

表8　3号土壙層序観察表

図版層序No.	色 JIS notation	調 土色	土性	組成	備考
1	10YR5/6	黄褐	シルト	炭化物1% 基盤礫1%	密
2	10YR4/4	褐	シルト		やや粗
3	10YR4/4	褐	シルト	炭化物1%	やや密
4	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト		やや密
5	10YR5/2	灰黄褐	シルト	oa−a1% 基盤礫1%	やや粗
6	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	炭化物1%	
7	10YR4/4	褐	シルト		やや粗
8	10YR5/3	にぶい黄褐	シルト	炭化物2%	やや粗
9	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト		やや密
10	10YR5/6	黄褐			やや密
11					
12	5YR5/6	明赤褐	ローム		ロームブロック
13	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	炭化物3%	やや粗
14	10YR4/2	灰黄褐	シルト	炭化物1% oa−a3%	やや粗
15	10YR5/8	黄褐	シルト	oa−a1%	密、堅緻
16	10YR6/3−6/4	にぶい黄橙	ローム	oa−a1%	密、堅緻
17	10YR4/4	褐	シルト		密、堅緻
18	10YR5/2〜5/3	灰黄褐〜にぶい黄褐	シルト		粗
19					
20	10YR4/3	にぶい黄褐		oa−a1%	やや粗
21	10YR5/2	灰黄褐	シルト	oa−a1% 炭化物1%	やや粗
22	10YR5/2	灰黄褐	シルト	oa−a15%	やや粗
23	10YR4/4	褐	シルト		やや粗
24					
25	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	炭化物1%	やや粗
26	10YR5/2	灰黄褐	シルト	oa−a3%	やや粗
27	10YR5/2	灰黄褐	シルト		
28					

竪壙Bの調査区中央部附近に壙の両壁面に対をなして6ヶの柱穴と2本の浅い溝が確認された。6ヶの柱穴の柱間はEPA〜EPA'のラインでは110cm、3.6尺、84.8cm、2.8尺、EPB〜EPB'のラインでは100cm、3.3尺、84.8cm、2.8尺でありやや総長は前者が長い。また北東より南西へ壙をわたす距離は200cm、約6.6尺等間である。柱穴の深さ20cm〜37cm、柱穴掘り方は20cm×20cm前後、柱痕跡は10cm×11cm〜16cm×15cm程でほぼ垂直に立ち上がる。また柱穴の周囲をめぐる溝は深さ7cm〜30cm、長さ2m、幅30cm〜45cm程である。柱穴と溝は重複関係がない事より同時期と

考えられる。尚この施設は空壕B調査の際空壕B覆土除去後、確認されており空壕Bと同時期と考えられる。

(4)出土遺物（第10図、11図 PL11～13）

陶磁器（第10図、11図、PL11、12）

青磁（PL11－31～46）　31は線描きの簡略化した剣先蓮弁を有する碗、34は外面口縁下に横線が描かれる。雷文の省略形と思われる。比較的薄手である。彩調はグレイみの黄緑である。胎土はグレイ。36は直口縁無文の碗、42はヘラ書きの蓮弁を有する碗である。釉調はグレイみの黄緑で透明感が強い。胎土は明かるいグレイ。46は見込みに印花がある碗である。高台内の釉は払われる。釉調はグレイみの緑、胎土はあかるいグレイである。尚見込み部分が若干盛り上がる。

染付　PL11－52、57は蓮子碗である。57は体部に梅月文が描かれる。第10図8は見込みにほら貝が描かれるもので、やや緑色の釉がかけられる。骨付以下露胎で高台にはカンナ目を残す。第10図3は見込みに如意頭雲を描く碗で高台脇に2条の図線が巡る。皿では第10図1は低い内湾した胴をもつもので口縁内部には四方樺文、見込みには猿が描かれる。第10図10、4同も同タイプと思われるもので、それぞれ見込みに鹿、獅子を描く。その他基筒底の皿、端反りの獅子皿がある。第10図2は端反りの小坏で見込みには吉祥字が描かれる。高台内まで施釉され、畳付の釉は払われる。やや灰色味の釉がかけられる。

その他　第10図7は唐津の皿で胴部がやや外反するもので透明釉がかけられる。9は美濃灰釉の皿で、見込みに菊の印花が描かれるもの。口唇が大きく端反りとなる。その他白磁の端反り皿、越前系の擂鉢等が見られる。

鉄製品（第11図15～17）

第11図15は小札、16は茶釜、17は鍵状のものである。銹化が著しい。

銭、銅製品（第11図21、24～26）

24は永楽通宝、25は洪武通宝、26は政和通宝である。21は円形の偏平なもので、表側には若干高くなる外部があり、中央部には二条の隆起した線が巡る。用途不明。

石製品（第11図18～20、22、PL17～18）

砥石、第11図18（PL17－35）は表面にのみ砥ぎ面があり、擦痕は縦走するものと斜行するものがある。石質は他の砥石に比し粒子が荒く、固い。色調はうすい黄みのピンク、断面形は長方形でやや板状となる。第11図19（PL17－36）は研ぎ面は4面。右側面にやや細かい擦痕が横走する。表面、左右側面、裏面はつるつるした感じである。裏面及び左側面に斜行するやや荒い擦痕あり。石質は粒子が細かい。色調は暗いグレーである。断面形は方形を呈する。尚表面は上下にやや碗曲している。第11図20（PL18－3）は表、裏面、右側面3面に研ぎ面がある。断面形は板状を呈する。擦痕はやや緻細である。第11図22（PL18－15）は第7図24とほぼ同様なものである。上端表裏面2面に研ぎ面あり。PL17－59、60は砂岩質のものである。PL17－40、37は38と同様に硬く重く、目が荒い石質である。37は研ぎ面が4面であり、やや荒い擦痕が入る。断面方形である。40は研ぎ面が表裏、上下、左側面と5面に入る。やや細かい擦痕が入る。

3　1号土壙（第12図、13図、PL 8、19）

(1)位置・概要

14K16区、21区にあり空壕B東側肩にあたる。長軸6 m、短軸3 m、深さ37cm程である。空壕B附属の橋跡と隣接する。尚空壕B、空壕B附属の橋跡との重複関係は附図、第9図のような結果となったが不明な点が多々あり、来年度再報告をしたいと考えている。

(2)層序（第12図）

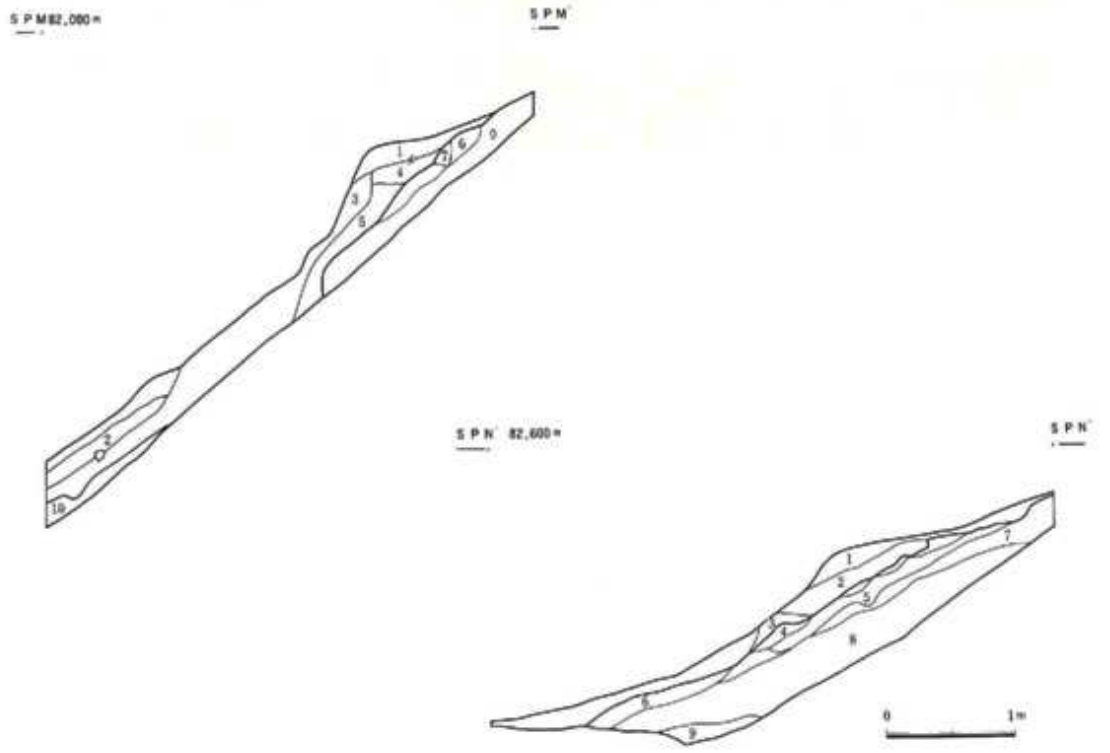
図5～7は10YR3/4シルトに基盤礫5％前後、炭化物含有であり4はソフトロームブロック、9、11は焼土粒と炭化物とロームブロックの層、11は焼土＋炭化物の層である。

(3)遺物分布状況

全体として東方向は壺の破片類が散乱し、中央部にその底部が斜めに伏せられている。染付は破片となって何枚か縦に重なり合う。青磁碗は伏せられた状況、美濃小皿は伏せられて重なり合う状況である。表6は覆土成分表である。それぞれE番号は覆土内陶磁器の番号であり、その内側に炭化物が附着していたものである。それぞれ穀物の種子が最も多かった。またそれ以外の覆土ではスラッグが多かった。

(4)出土遺物（第14図、PL19）

陶磁器、鉄製品、骨角器、獣魚骨、炭化材が出土した。



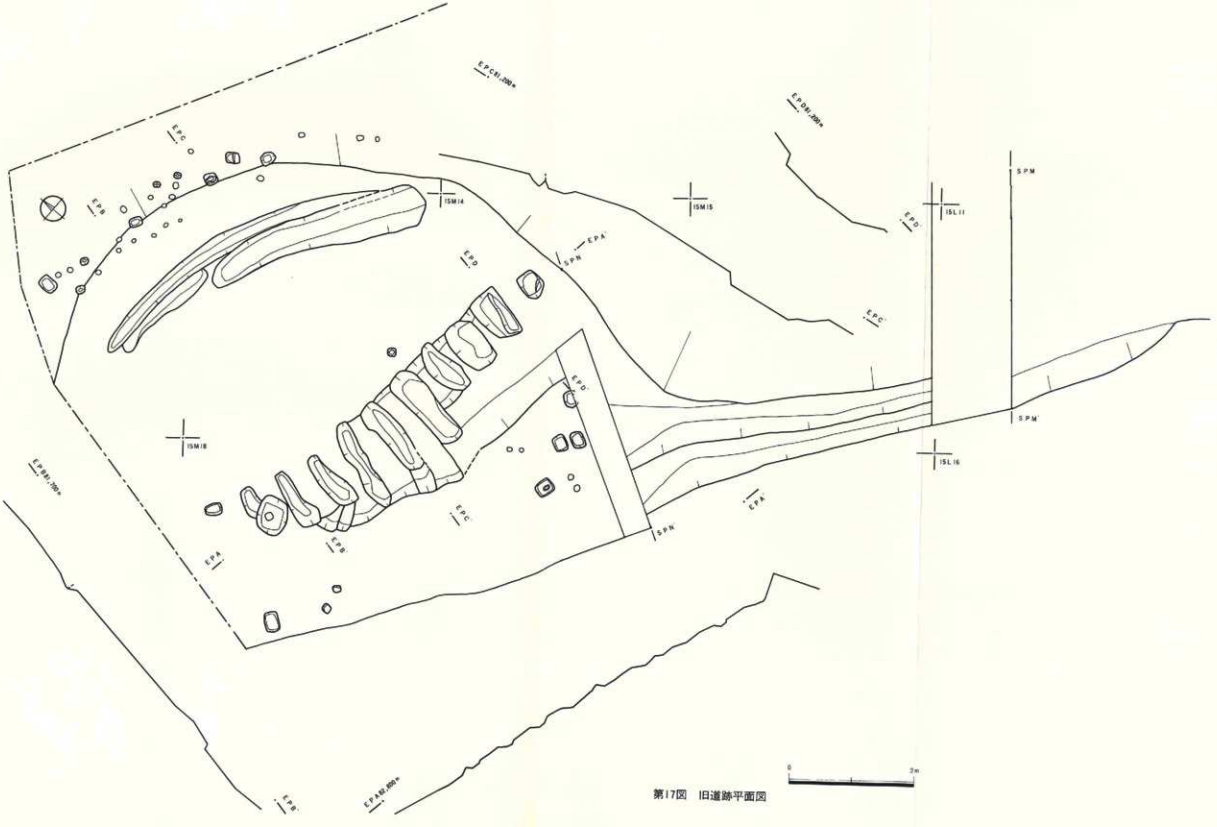
第16図　旧道跡土層堆積図

表9　旧道跡　I5L11区トレンチ(SPM-SPM')土層観察表

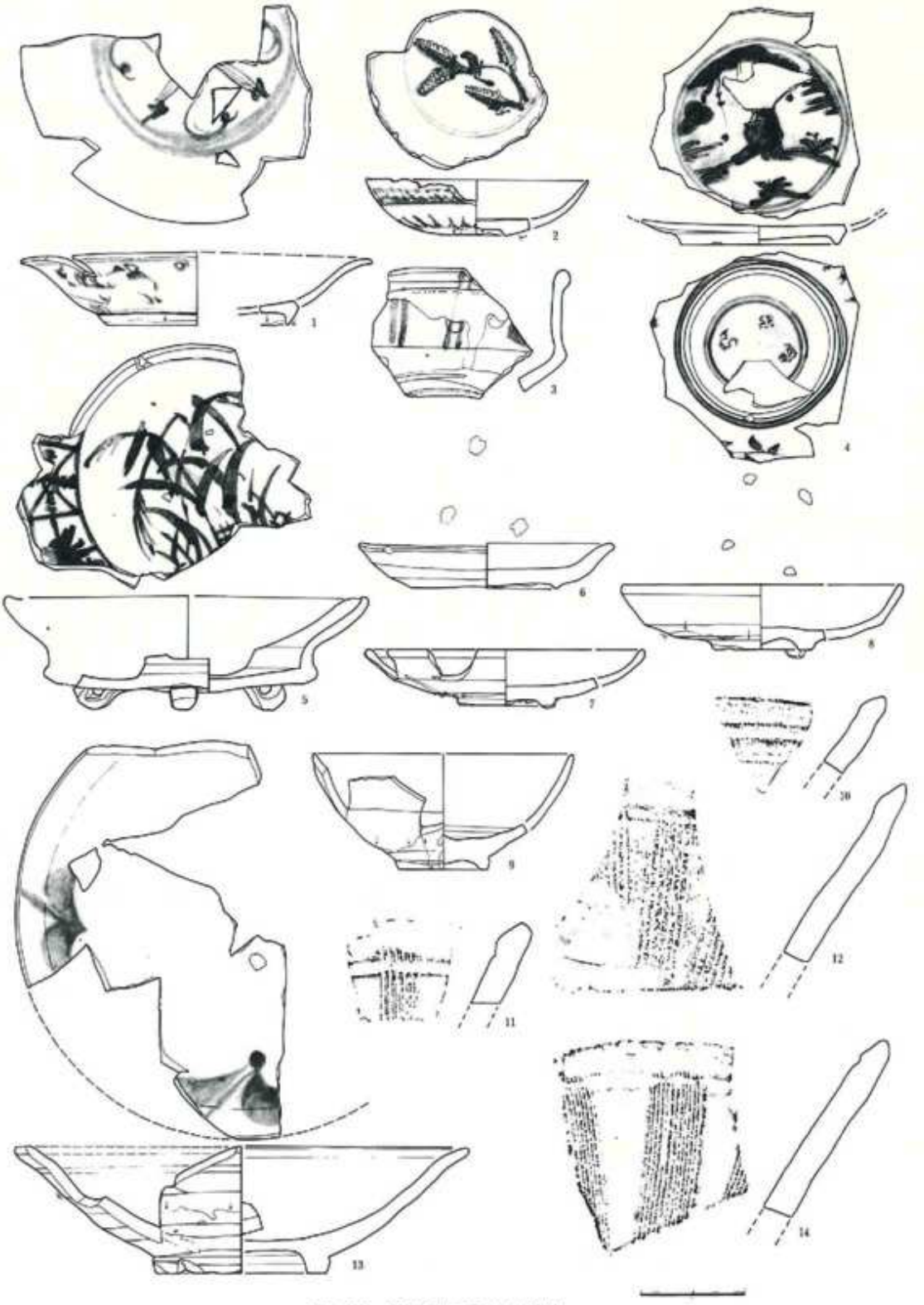
図版No. 層序	層序 基本層序	小区分	細別	色調 JIS notation	土色	土性	組成	備考
1	I			10YR4/4	褐		礫・玉砂利含有	やや密
2	I		1				基盤礫＋砂礫層	やや密
3	I		2	10YR4/4	褐		砂礫　5%	やや粗
4	I		3	10YR3/4～3/3	暗褐	シルト		やや粗
5	I		4	10YR3/3	暗褐	シルト		やや粗
6	III		1	10YR5/6	黄褐	シルト	基盤礫＋砂礫50%	やや密
7	III		2	10YR4/3	にぶい黄褐		基盤砂礫　5%	やや密
8	III		3	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	砂礫	やや粗
9	III'	A					基盤砂礫層	粗
10	III'	A					基盤砂礫層	やや密

表10　旧道跡　I5M14、I5M19区トレンチ(SPN-SPN')土層観察表

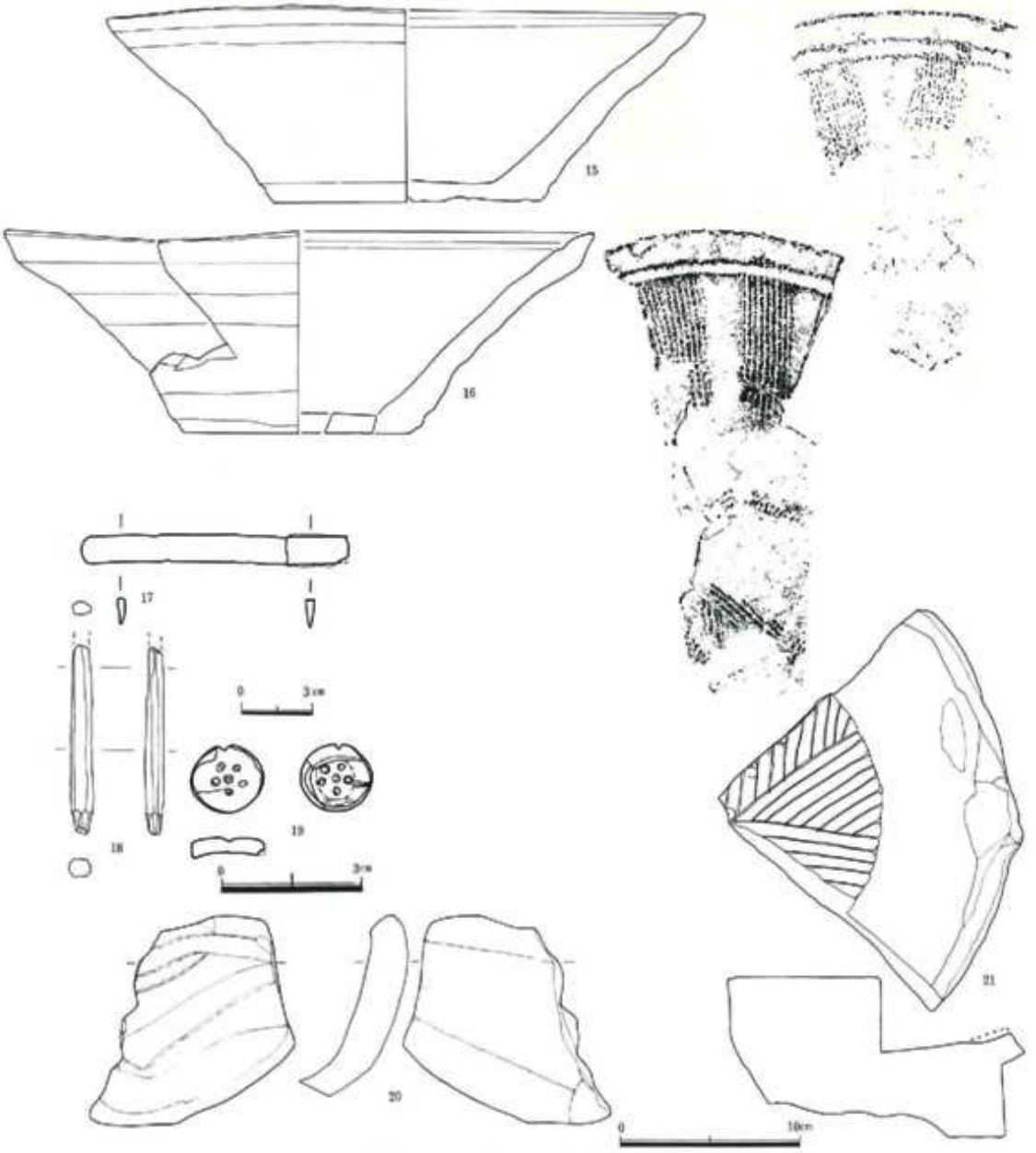
図版No. 層序	層序 基本層序	小区分	細別	色調 JIS notation	土色	土性	組成	備考
1	I			10YR3/2	黒褐	シルト	基盤礫極小　5%	やや密
2	I		1	10YR3/2	黒褐	シルト	炭化物　2%	やや粗
3	I		2	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物　1%	やや粗
4	III		1	10YR3/4	暗褐		極小基盤礫10%	
5	III		2	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	極小基盤礫	やや密
6	III		3	10YR3/4	暗褐	シルト	基盤礫 炭化物　10%	
7	III		4	10YR5/6	黄褐	シルト	ローム質・ローム質粘土層　極小～小礫5%	軟
8	III		5	10YR5/6	黄褐	シルト	極小～小基盤礫ローム10% 基盤礫多い炭化物3%	
9	III'	A				砂礫層		


EPC
EPB
ISM14
EPD
SPN
EPA'
ISM15
EPD'
ISL11
EPC'
SPM
SPM'
ISL16
EPD
ISM18
EPC
EPB
EPA
SPN'
EPA'
EPB'
0
2m

第17図　旧道跡平面図



第18図　旧道跡周辺出土遺物



第19図　旧道跡周辺出土遺物

陶磁器（第14図、PL19－1～15）[注1]

青磁、計4点出土した。第14図8（PL19－3）は低平で全体に肉厚な碗であり、腰部は若干外に張る。胴部にはくし書きによる蓮弁が施されている。口縁部外、及び胴～腰部分に互い違いに文様が入る。高台内のみ露胎となる。内面見込みは直径2 cm程釉が剥ぎ取られているが、蛇の目とならない。PL19の5も同タイプである。第14図9（PL19－8）も低平で全体に肉厚な碗である。腰部は若干外に張る。胴部にはヘラ書きの蓮弁が幅広に切られている。口縁外部にはヘラ書きにより雷文の省略された横線が入る。畳付きの釉は払われ、高台内露胎となる。内面見込みは蛇の目である。それぞれ口径8.9cm、器高3.2cm程である。

染付（第14図1、2、PL19－1、2、4、6）

第14図1（PL19－1）は蓮子碗である。口縁内外に2条の圏線が巡り、胴部、見込みに梵字文が描かれる。尚見込み外周、高台脇にも2条の圏線

が巡る。畳付きは砂が少量附着する。高台内も施釉される。第14図2（PL19－2）は端反りの皿である。口縁内外に圏線が巡り、胴部には唐草、見込みには玉取り獅子が描かれる。尚見込み外周、高台脇にも2条の圏線が巡る。畳付きは斜めに面が取られ、若干の砂が附着する。高台内は施釉される。尚染付は第14図1が1点、第14図2と同型が他に2点計4点が出土している。第14図1は口径14.3cm、器高5.2cm、第14図2他2点は径12.4cm、器高2.6程である。

美濃（第14図5～7、PL19－9～14）

いずれも小皿である。高台もたない皿である。見込みには印花がある。第14図5（PL19－10）とPL19－14のように胴部があまり内湾せずにほぼ直線的に立ち上がるものとPL19－9、11第14図7（PL19－13）のやや内湾するもの、第14図6（PL19－12）のように内湾の度合がややきついものがある。これらは口径は4.5cm～4.9cmとややばらつきがあるものの、器高は1.4cmとほぼ同じである。

小壺（第14図10、PL19－15）

器高25cm、口径19cmの小型の壺である。胴部には中央に財付状の隆帯が廻る。

鉄製品（第14図3、4、PL19－18～25）

第14図3（PL19－23）は断面円形を呈するもので、外周が厚さ1mm程の薄い鉄で覆われ、内部が木質となっているものである。表面には若干の錆が附着する。先細りとなるが、先端部は丸味を帯びる。木質部の更に内側に鉄があるかどうかは不明。第14図4（PL19－22）も第14図3とほぼ同様なものであるが、木質部断面形は隅丸方形となる。PL19－18、24は和釘、24は2.3寸程の大きさである。PL19－19～21も釘と考えられるが極めて小型であり、柵列跡周辺部の焼土6覆土より出土した釘と殆んど同じ大きさである。長さは7分程である。

骨角器（第14図12、PL19－27）ほか

直径1.8cm、厚さ4mm程の円盤状のものである表裏面、周縁とも精緻な研磨が施されている。表裏ともほぼ中央に径0.8mm程の穴があけられる。深さは0.5mm程で反対側に貫通しない。また表面上下周縁部は斜めに削平、研磨されている。その他獣骨、大型魚骨の椎骨、木炭等が出土している。

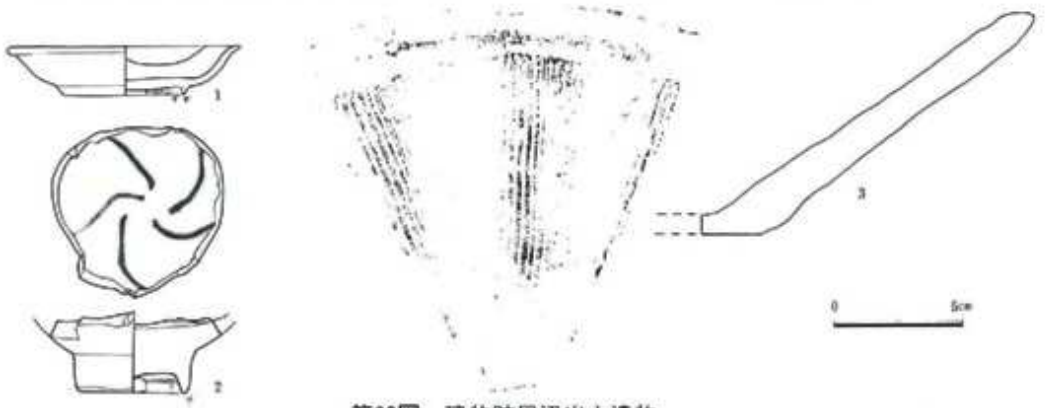
4　2号、3号土壙

(1) 2号土壙（附図、第9図）

1号土壙の東にあり、空壕B附属施設である橋跡と重複している。尚この重覆関係等についても次年度報告したい。覆土内より木炭45.7g、鉄鍋、釘破片22g、厚さ2mm、外径3mm程の群青色の玉が検出されている。

(2) 3号土壙（第15図）

14L24区、空壕B北西壁面にある長軸130cm、短軸115cm、深さ80cm程で不整円形を呈する。尚壁面南東側は若干オーバーハングする。掘りこみ面は基盤である。土壙平面形では中央部に10cm程の段差をもつ方形の掘りこみがある事、鉄片16.6g、骨片2.3g、木炭311.4gが覆土内より検出される事より火葬墓とも考えられるが明確でない。尚第15図右は炭化物の集中範囲である。尚方形の掘りこみの規模は約125cm×90cm程である。セクションでは覆土内にはOS－a、炭化物等が含有され、やや密な部分とやや粗の部分がある。図1～4はやや密である。5以下は密な箇所もあるが、全体としてはやや粗である。特に底面近く図20～22、14、16にはOS－aが含有される。



第20図　建物跡周辺出土遺物

5　旧道跡

(1)位置・概要

空壕A北西側、調査区北西の小沢を狭んだ小台地上にて旧道跡、階段状遺構、溝、小柱穴が検出された。

(2)旧道跡（第17図、PL 8）

15M13区～15L11区、空壕A北西側壁面に長さ9.5m、幅1 m程の旧道跡が検出された。SPN－N′では図層序4の面が道路面となる。基盤礫を含むやや堅致な層で整地層のⅢ層よりなっている。SPM～M′は15L11区トレンチ南壁の土層であるが、ここでは図層序6以下が道路面と考えられる。6は基盤礫を含むやや堅致な層でⅢ層である。しかし、明瞭な平担面は確認出来なかった。

(3)階段状遺構（第17図 PL 8）

15M13～19区、当台地の中央部にて検出された。最大幅1.7m、長さ6 m程である。尚当台地はⅠ～Ⅲ層の堆積が薄く基盤まで25cm程である。平面形は浅く短い溝を横に平行に何本も掘り階段状としている。溝は西側で長さ100cm、深さ5 cm、中央部は長さ1.7m、深さ9 cm、東側で長さ80cm、深さ11cm程となる。EPA～A′によるとゆるい傾斜の階段状となり空壕Aへ向かっている。しかしその延長は空壕A壁面には見られず、空壕A壕底部には至らない。掘りこみ面はⅢ層及び基盤である。

(4)溝・柱穴

階段状遺構北東側、当台地肩附近にて3本の浅い溝が検出された。3本はそれぞれ重複関係にあり内側が一番新しい。一番新しい溝は幅60cm、長さ3.6m、深さ20cmである。3本の溝とも底部に小柱穴らしいものは見当らない。またその外側の台地縁辺では溝を囲むように小柱穴が検出された柱穴はいずれも深さ5～10cm程で浅い。これら溝、柱穴が検出された周辺はⅠ層のみの堆積となっており、いずれも基盤が掘りこみ面となっている。尚15M18、19区階段状遺構周辺に柱穴群が散在する。掘りこみ面はⅢ層か基盤であるが、規則性がなく深さも6～11cm程と浅く、階段状遺構、その他との関連性は見出せない。

(5)出土遺物（18、19図、PL12～15、PL10－57）

陶磁器

青磁　PL12－47は皿である。見込みの釉が剥ぎ取られている。高台畳付きは面取りがなされ、高台内は露胎となる。釉調はにぶい黄緑、胎土はグレイである。

染付　第18図1は端反りする大型の皿で口径16.5cm、底径8.4cmである。胴部には　　が描かれ、見込には　　が描かれる。高台畳付きは斜めに面取りされ、砂が附着する。高台内は施釉される。

第18図2（PL12－51）は碁笥底の皿である。口縁外には波頭文が描かれ、胴部には芭蕉葉文が描かれる。見込みには草花が描かれる。4は低い内湾した胴をもつ皿である。胴部は折枝文、高台内には2条の圏線で囲まれた弘治年造が入る。見込みには山水、人物が描かれる。尚高台内の弘治年造は[注2]この陶磁器の実年代である。ちなみに西暦では1555年～1557年である。PL12－52は胴部に芭蕉葉文の略化した文様をもち、胴部が中央より外反する皿である、見込み外周は雷文、中央には牡丹が描かれる。高台内畳付きの釉は払われる。見込みには富貴佳賓が描かれる。その他口縁部破片では内湾し外面に折枝文、内面に四方樗文をもつもの等がある。

唐津　第18図3（PL13－24）は沓型碗である。第18図7、8（PL13－4、8）は灰釉の皿である。8はやや腰の張る皿である。見込みに胎土目積の痕跡を残す。7の釉調はにぶい黄緑、8はグレイみの黄緑である。第18図9（PL13－23）は灰釉の碗である。釉調はにぶい黄緑。第18図13（PL13－1）は唐津の大皿で内面に鉄釉で絵が施される。口径21.2cm、器高6 cm、切高台、高台内は露胎である。釉調はグレイみの黄緑である。

志野　第18図6（PL14－1）は全体に肉厚な皿である。全向に貫入が入る。見込み、高台内に重ね焼痕有。釉調は明るいグレイである。第18図5（PL14－4）は向付と呼ばれるものである。腰部附近より外反し、口縁でやや内湾する。口唇は曲線となりややゆるい波状となる。口縁内部～胴部には区画文が入り、見込みには草花が描かれる。いずれも鉄釉で描かれる。底部は三基の脚が貼付されている。釉調は乳白色を呈する。その他PL14－3、5、6、11～14等がある。

越前　第19図15（PL15－31）は口唇断面形は丸味をなし、水平に近くなるもの。内面口縁下1 cmの所に凹線が廻る12条1単位の卸し目が4 cm間隔で入る。卸し目は凹線の上からも施される。第

19図16は口唇の断面形が鋭角であり、外面口端直下でやや直立気味に立ち上がる。内面口縁下に段が廻り9条単位の卸し目が　cm間隔で入る。卸し目は段の上からも施される。

銅製品　第19図17は小柄である。柄の部分のみ残存する。

骨角器　第19図18（PL18－25）は中柄である。先端部を欠損している。海獣骨製。第19図19（PL18－29）は14K16区1号土壙にて出土したものと同類である。表裏面に径1 mm前後の穴を6ヶあける。反対側へ貫通しない。深さは0.5mm程である。表裏面、周縁がていねいに研磨されている。表面はやや内側へ凹む。

石製品　第19図20（PL18－12）はこね鉢[註3]である。外面はよく研磨されている。口唇内面に幅1 cm程削平した面を作る。器内はやや平滑となる。第19図21（PL18－9）は茶臼の下臼である。受け皿部には図示していないが、中心より中内部まで同心円状の擦痕が多数見られる。受け皿下の台部分にも同心円状に荒い擦痕がある。

6．平担部建物跡

(1)位置・概要

空壕B東側に昨年度と同様に平担面が広がっている。空壕B東側2 m程までは旧地表面のⅣa層がある。これより東はこの上に空壕B掘り上げ土等を盛土し、平担面を作り出す。この盛土整地面にて建物跡が検出された。尚焼土、その他との関係は充分検討できず、調査不充分であるため、柱穴列等から想定した。

(2)建物跡

①第1号建物跡（第21図）

調査区南端で検出した。2間×3間の東西棟。柱間が不揃いである。南北4.18m、東西5.87m、面積は24.54m²である。

②第2号建物跡（第22図）

調査区南端で検出した。2間×3間の南北棟。柱間が不揃いである。南北4.72m、東西4.36mで面積は20.58m²である。第1号建物跡と重複関係にあり、当建物跡が新しい。柱穴ではP118とP194、P153とP93、P127とP129、P202とP138が重複関係にある。また一点破線で図示した建物も隣接している。さらに南側は未調査のため全体を検出出来なかった。

③第3号建物跡（第23図）

調査区中央部で検出した。2間×2間の南北棟。東西の柱間はP41－P43－P65が5.2尺、8.8尺P－P175－P78も5.2尺、8.8尺となる。南北5.81m、東西4.24m、面積24.63m²である。尚点線で図示した建物跡も想定されるが明確でない。その他調査区中央部では第24図のように3軒程の建物跡が想定されるが明確でない。

④第4号建物跡（第25図）

調査区北端で検出した。3間×2間の南北棟。柱間は不揃いである。南北5.2m、東西2.85m、面積14.82m²である。

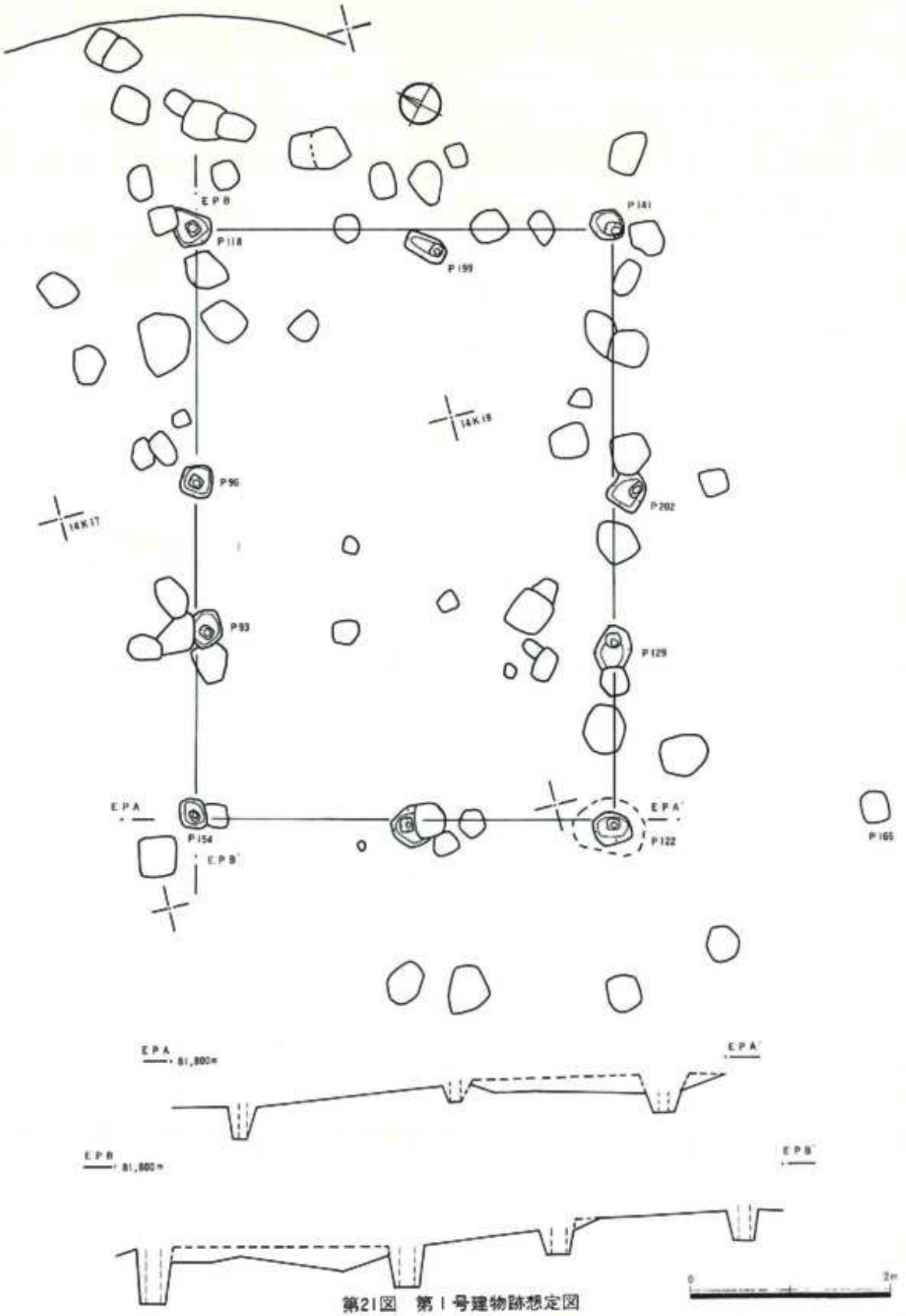
(3)出土遺物（第20図、PL14－15～35）

1は白磁の端反りの小皿である。口径8.9cm、器高1.9cmである。高台内とも全面施釉され、畳付きには砂が付着する。その他青磁では線描きの剣先蓮弁文碗、染付は見込みに吉祥字が施される碁筒底の皿、美濃の剣先蓮弁文の碗等がある。越前擂鉢、かめ等もある。　（斉藤邦典）

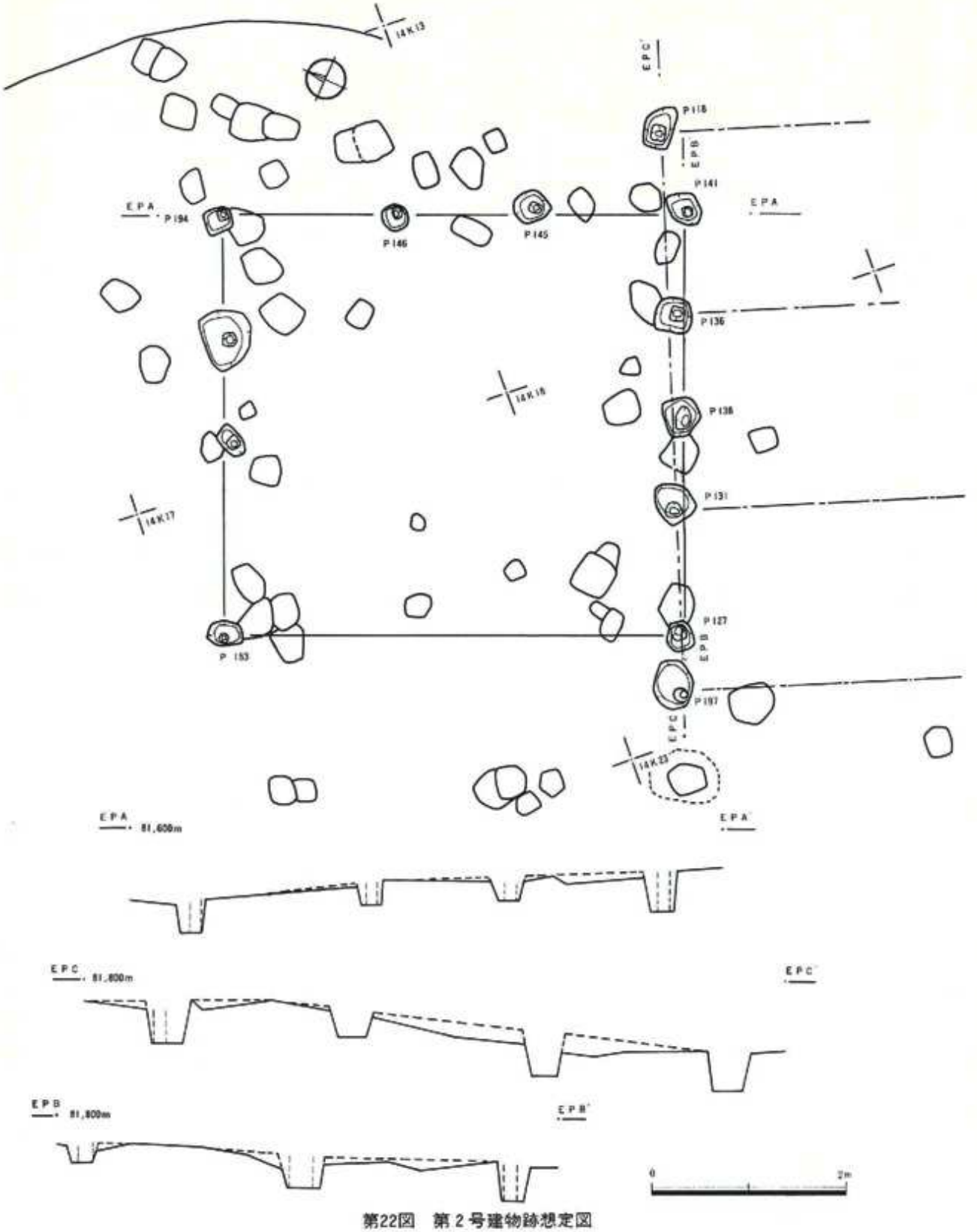
註1　柵列跡周辺、空壕B周辺、平担部建物跡規模等は鈴木亘先生に御教示を賜わった。誤りは筆者の責である。

2　九州陶磁文化館　大橋康二氏に実見して頂き御教示を得た。誤りは筆者の責である。

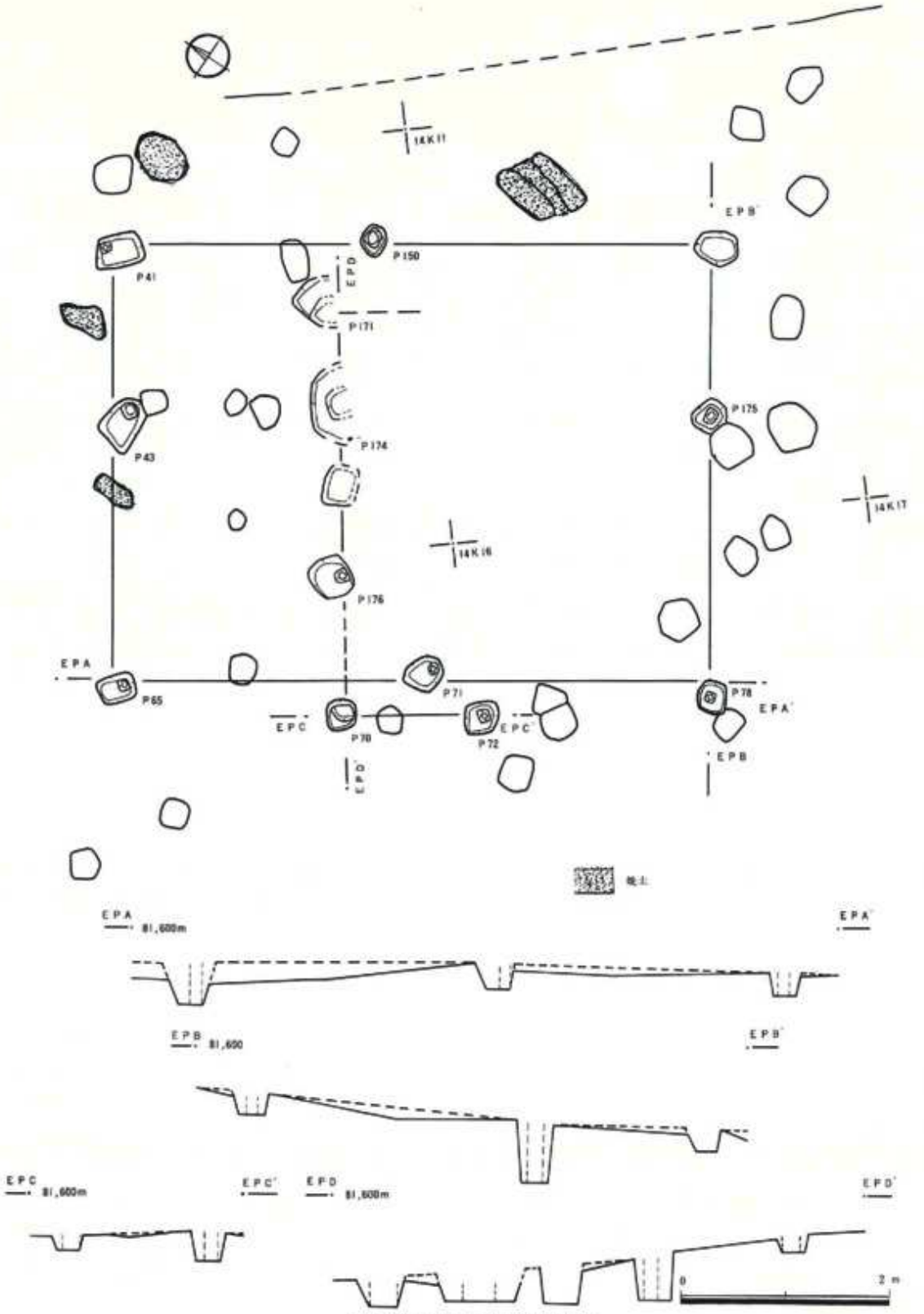
3　石川県立埋蔵文化財センター　垣内光次郎氏に実見して頂き御教示を得た。誤りは筆者の責である。　（斉藤邦典）



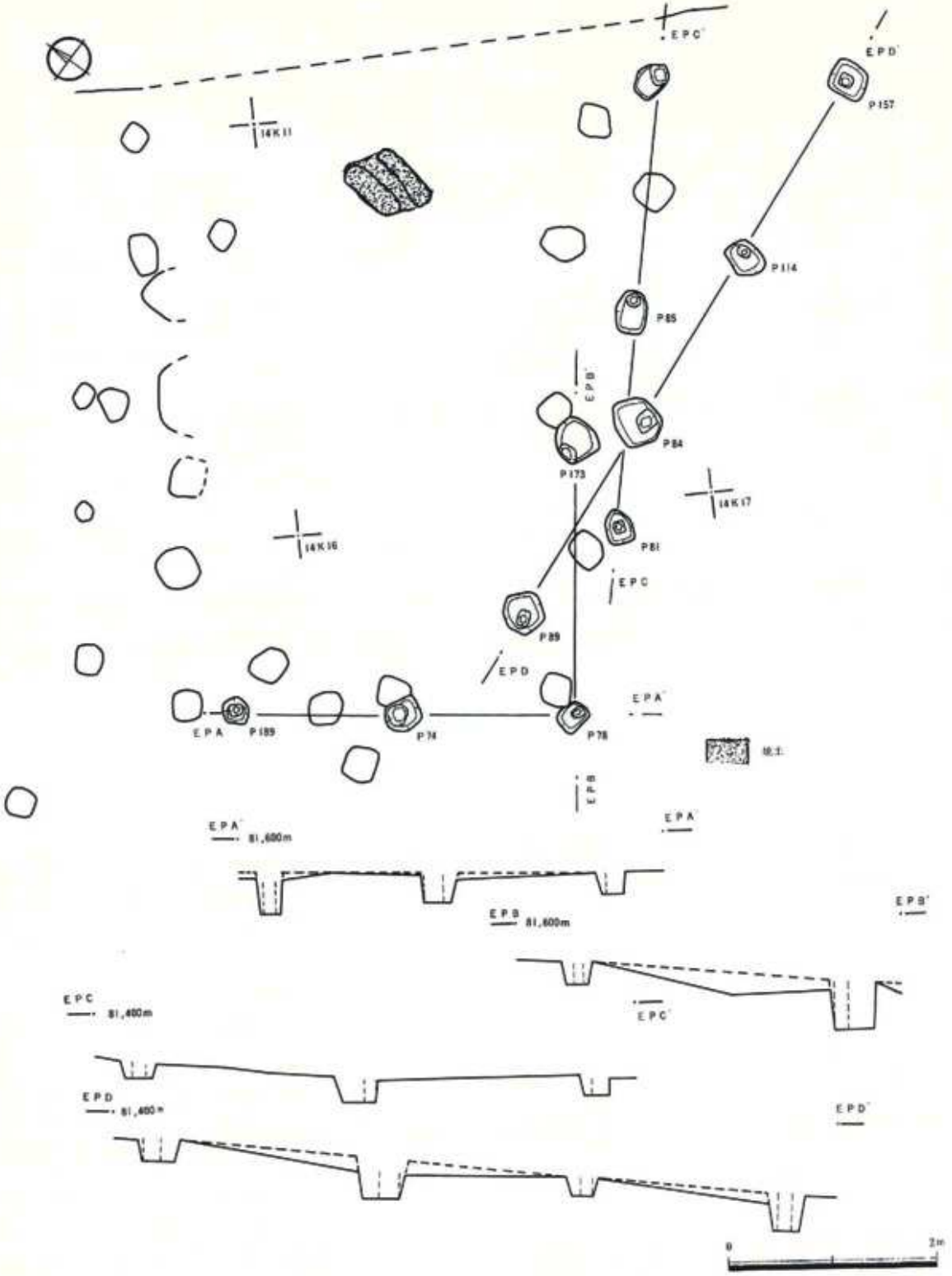
第21図　第1号建物跡想定図



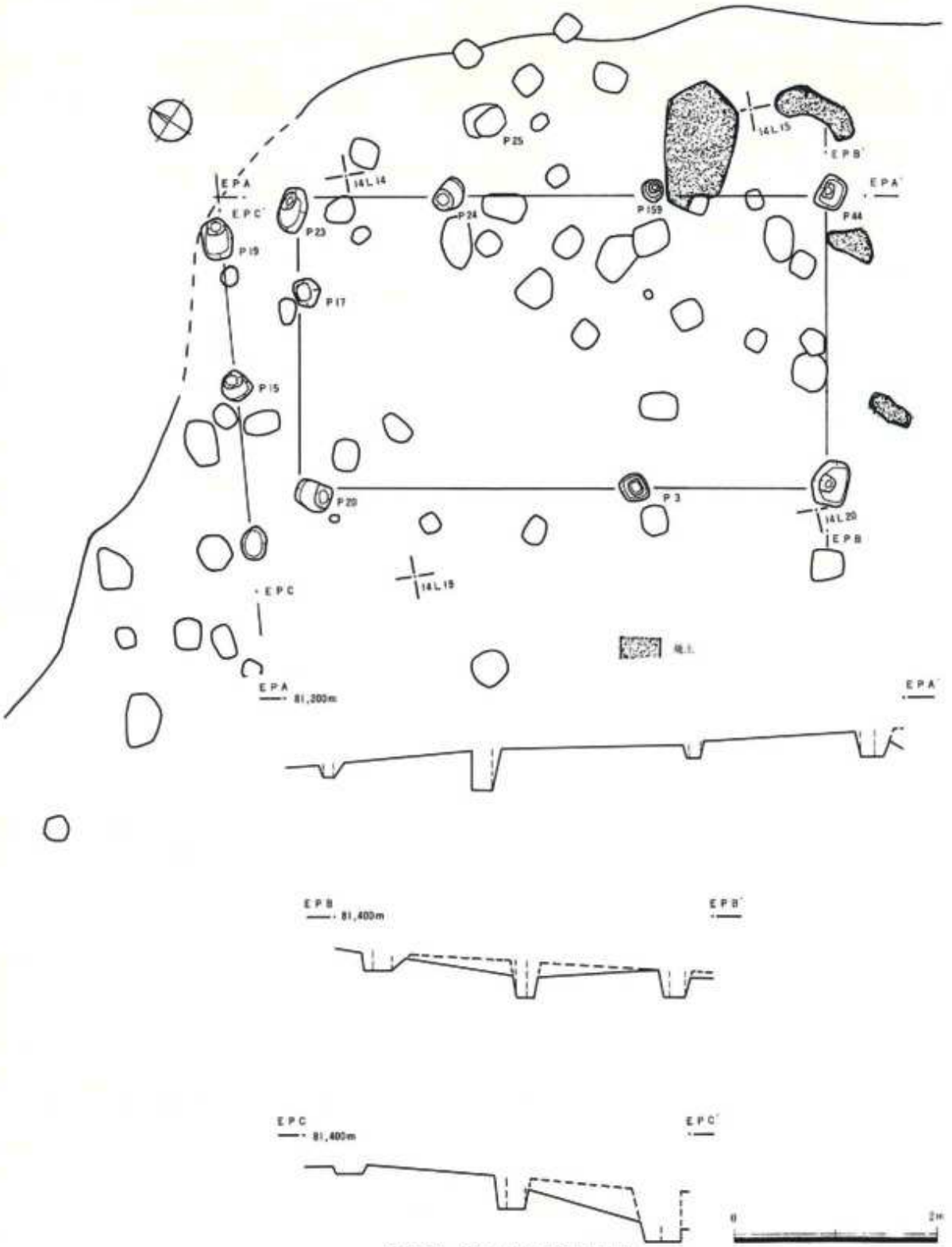
第22図　第２号建物跡想定図



第23図　第3号建物跡想定図


EPC'
EPD'
P157
14K11
P114
P85
EPB'
P84
P173
14K17
14K16
P81
EPC
P89
EPD
EPA'
EPA
P189
P74
P78
地土
EPB
EPA'
EPA'
81,600m
EPB
81,600m
EPB'
EPC
81,400m
EPC'
EPD
81,400m
EPD'
0
2m

第24図　建物跡想定図



第25図　第４号建物跡想定図

表11 陶磁器集計表

※接合前総破片数

調査区	器種	産地	瀬戸						中国						朝鮮								
		種別	青磁	白磁染付	本絵	刷毛	小計	龍泉窯	龍泉窯	景德	澄明	小計	越前	珠洲	信楽	唐津	かわらけ	小計	合計	近世	総計
構列跡周辺	碗		37	2	24			63	6	9	6	35	21	84						84		
	皿		9	61	96			166	30	1	2		68	234						234		
	坏				1			1						1						1		
	鉢		1					1						1						1		
	香炉								1				1	1						1		
	壺														51	1			52	52		
	瓶子														71		24		95	95		
	瓶																					
	その他										4	1	5	5				1	1	6		
	計		47	63	121			231	37	10	12	36	95	326	122	1	24		1	148	474		
空壕跡周辺	碗		21	4	34			59	3	10		1	20	79							79		
	皿		13	81	103	1		198	56	1	5	28	90	288							288		
	坏			2				2						2							2		
	鉢																						
	香炉								1				1	1							1		
	壺														69					69	69		
	瓶子														61		25			86	86		
	瓶														3					3	3		
	その他		1					1			3		3	4				4		4	8		
	計		35	87	137	1		260	66	11	8	29	114	374	133		25		4	162	536		
1号土坑	碗				13			13						13							13		
	皿		5		14			19	6				6	25							25		
	坏																						
	鉢																						
	香炉																						
	壺																						
	瓶子														37					37	37		
	瓶																						
	その他																						
	計		5		27			32	6				6	38	37					37	75		
旧道跡周辺	碗		7		11			18		2	1	9	12	30							30		
	皿		4	68	81			153	18		8	46	72	225							225		
	坏																						
	鉢																						
	香炉																						
	壺														29					29	29		
	瓶子														20		1			21	21		
	瓶																						
	その他									18		18	18								18		
	計		11	68	92			171	18	2	27	55	102	273	49		1			50	323		
建物跡周辺	碗		6	3	11			20	2	2			4	24							24		
	皿		2	17	25			44	26	2		3	31	75							75		
	坏		1	1	2			4						4							4		
	鉢		2					2						2							2		
	香炉																						
	壺														17					17	17		
	瓶子														36		2			38	38		
	瓶																						
	その他																		1	1	1		
	計		11	21	38			70	28	4		3	35	105	53		2		1	56	161		
表採	碗		6	2	6			14		3	1	1	7	21							21		
	皿		5	24	34			63	17		2	10	29	92							92		
	坏																						
	鉢																						
	香炉																						
	壺														5					5	5		
	瓶子														6		6			12	12		
	瓶										4			5									
	その他		1					1					4								5		
	計		12	26	40			78	17	5	7	11	40	118	11		6			17	135		
調査地区外表採	碗																						
	皿																						
	坏																						
	鉢																						
	香炉																						
	壺														1					1	1		
	瓶子														3					3	3		
	瓶																						
	その他																						
	計														4					4	4		
総計	碗		77	11	99			187	17	29	8	11	64	251							251		
	皿		38	251	353	1		643	153	4	17	122	296	939							939		
	坏		1	3	3			7						3							7		
	鉢		3					3						2							3		
	香炉								2				2								2		
	壺														172	1				173	173		
	瓶子														234		58			292	292		
	瓶											1		32	3					3	3		
	その他		2					2			29		30						6	6	38		
	計		121	265	455	1		842	172	32	54	134	392	1234	409	1	58		6	474	1708		

Ⅲ 小　　括

(1)柵列跡周辺

柵列跡内側より柵列を支える控柱が検出された。柱穴は掘り方も大きく、深い。春～夏にかけての東風、冬期間の北、北西の季節風に対処のため、かなり頑丈に作られたと考えられる。他地割面1～8号の台地肩で検出された柵列では控柱的なものの検出がない。また当初予想されていた矢倉、桟敷等は確認出来なかった。その他当地区では10基の焼土が検出された。焼土は調査区南16L5、16K1区附近に集中し、その分布に偏りが見られる。覆土内より木炭、獣魚骨、スラッグ、鉄製品、陶磁器片、鍛造剥片、粘土塊が検出されている。粘土塊はすべて加熱されている。焼土4～6、8～10より検出された。いずれも1.5kg～2kgと多量である。それぞれ表面には板によると思われる圧痕棒による圧痕等が見られる。獣魚骨は焼土1～10すべてに検出された。陶磁器片はそれぞれ割れ口が鋭角をなし、大きさは3mm×4mm程と極めて小さく、人為的に打ち砕いた感じである。焼土1、3、4、6より検出した。鉄製品は焼土1～4、6、8より検出した。釘が多い。大きさは27mm×6mm×4mm程と極めて小さい。また24mm×8mm程の鎹も検出している。これら釘、鎹は通常出土するものよりはるかに小さく、釘では頭部のないものもある。スラッグは焼土1～3、5、6、8、10では4mm×3mm大の極小のもの、焼土4では50mm×20mm大のものである。

これらの事より粘土塊は本州の他遺跡[註1]では窯壁に使用されているものと写真で見る限りでは全く同じである。勝出館では可能性のある用途としては鍛冶が考えられる。地面に敷いて鍛冶の際、下からの湿気を防いだか、あるいは羽口の周辺に張りつけたもの[註2]と考えられる。骨片は鉄を溶解しやすくするのに使用された[註3]と考えられる。また四季を通じて極めて風通しが良好な場所である。特に焼土2、6では柵列の外に位置するため風がまともに当たる。これら風通しの良い所は鍛冶場としては好条件である。[註4]

(2)土壙

1号土壙については従来まで検出されなかったものである。出土した遺物より青磁クシ書き、ヘラ書き蓮弁文碗は15世紀、染付端反り獅子皿、梵字を描く蓮子碗、美濃小皿等は16世紀前葉～中葉のものである。これらよりこの遺構の時期は16世紀前葉～中葉と考えられる。尚この土壙、2号土壙については、その性格、他遺構との関係等未だ検討中である。3号土壙は墓の可能性が強い。

(3)旧道跡

階段状遺構、旧道跡は掘りこみ面等より館の時期と考えられるが空壕Aその他との関係が明確でない。また溝、小柱穴についても不明な点が多くこの小台地全体の調査にまつ所である。

(4)遺物

陶磁器では青磁のヘラ書き蓮弁、線描きの剣先蓮弁、染付の蓮子碗、端反り皿、碁笥底皿、内湾気味の低平な皿、唐津、志野の碗、皿と15世紀～16世紀末葉まで勝山館存続期間全般にわたっている。特に志野の筒型碗、向付等は喫茶に関するものである。鉄製品は釘、鎹が多く小札も若干出土しており、昨年度とほぼ同様である。石製品は砥石、硯が出土している。砥石の出土量が多く、荒砥、中砥、仕上げ等に分けられる[註5]と思われ、石質、形状も種々ある。また陶磁器は柵列跡へ帰属するものが少なくないと考えられる。（斉藤邦典）

註1　秋田県仙北群南外村大畑窯跡発掘調査報告書

2　開拓記念館　小林幸雄氏の御教示による。誤りは筆者の責である。

3　開拓記念館　小林幸雄氏の御教示による。誤りは筆者の責である。

4　開拓記念館　小林幸雄氏の御教示による。誤りは筆者の責である。

5　石川県立埋蔵文化財センター　垣内光次郎氏の御教示による。誤りは筆者の責である。

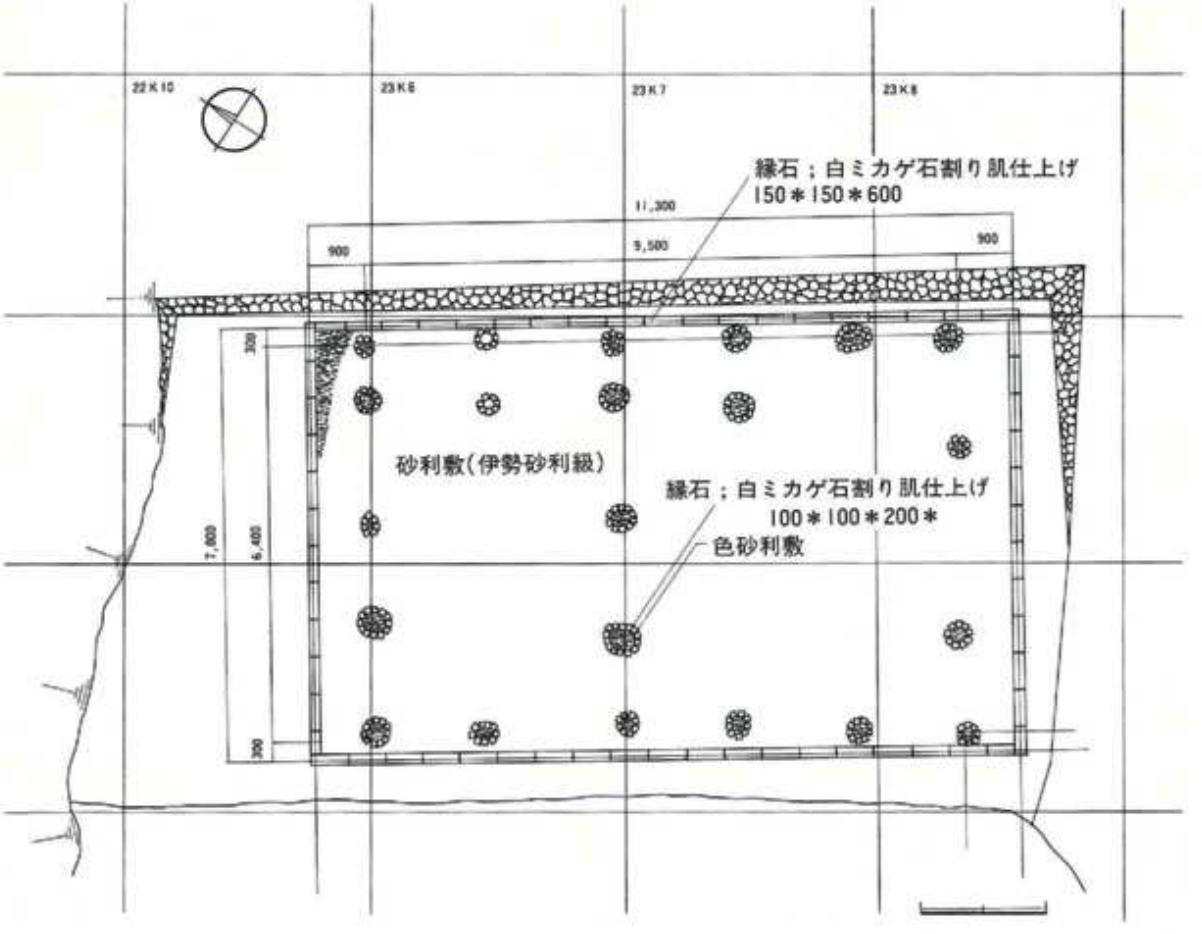
Ⅳ　保存処理

1．木製品

今年度は昨年度までにＰＥＧ含浸処理を完了した木製品のうち640点をエタノールによる表面処理を行った。その内訳は食膳具である箸、薬箸、はさみ串、飯ベラ、折敷、生活用具である栓、取手、下駄、曲物底、建築用材である柾材、角材、板材、杭、武具である中柄、鞘、鐵、その他用途不明品である。

2．鉄製品

1600点の処理を行った。従来通り錆除去、メタノール脱水、パラロイドＮＡＤ－10のナフサ溶液20％、30％による減圧含浸、接合、顔料補彩を行った。特に錆除去についてはコブ状錆等、頑固な錆が多く、無理に除去すると本体も損傷するため、最善の注意を払った。処理の内訳は生活用具の鍋、鍋つる、火打ち金、亨引き金、建築用具の釘、鎹、農工具の締め金具、武具の小札、小柄、小刀、その他用途不明品である。　　（斉藤邦典）



第26図　環境整備（８号地割面掘立柱建物跡）

V まとめ

勝山館の主体部は三段の大きな平坦面をもって構成されている。40°前後の斜度で5m余の段差のある第一、第二平坦面間の形成を明らかにする調査は二年目である。

館の中央を北東から南西に自然探勝路が縦断する。前年度のこの道路の南半部の調査により、第二平坦面端部における柵列、第一平坦面における二条の空壕跡、墓壙と思われる土壙、空壕外側の掘立柱、竪穴建物跡等の遺構が検出されたが、猶未解決の問題を残していた。又北半15L10～15区にトレンチを設定し二条の空壕の延長、柱穴等の遺構の存在が確認されたところである。

今年度は自然探勝路の北側を対象として発掘調査に臨んだ。

第二平坦面の柵列跡は調査区内で数条検出された。内側の最も新しいと推された一条だけが掘り上げられている。又、これを支える控柱かと推される遺構が想定された。他方この柵列に直交する溝（柵？）の一部が検出されており、その性格とも併せ検討することも必要かと思われる。

柵列を跨ぐ形で焼土溜りが検出されたが、柵列との前後関係・位置を含め更に検討することが必要であろう。焼土1、焼土6から抽出された青磁片は再火熱を受けているが、焼土3から抽出された青磁の細片にはその跡が明らかでない。

柵列が構えられた第二平坦面の端部は盛土成形されており厚い所では80cm程にもなる。その斜面の角度は約40°であり、若干の崩落は想定されるが、下位の空壕の位置からしても、柵列の前方にそれ程の空間は想定できそうにない。柵列の溝はこの上面からの掘り込みであるから検出はむずかしいところでもある。

本地区出土遺物中に志野・唐津をはじめ美濃（PL．11－1～4、12－63）染付（10－52）等の一群がみられる。このうち10－33、13－22、14－4等は他地点では従前見られなかったものである。後世、耕作時等の移動も考慮しなければならないが、茶臼や信楽壺？（16－18）、茶釜（17－21）等とともに第二平坦面の性格を考える資料の一つとできそうである。

一方、焼土中の粘土塊や、ノミ？等の出土品も更に検討する必要がある。

二条の空壕のうち規模の大きい内側のAと仮称するものは北東に折れて寺の沢に切り落される。これは前年度調査の南端部と同じである。只、南端で見られた壕が二又に分れ、他の一条が第二平坦面の裾に廻りこむ形状は検出されていない。或いは更に北東方の調査が必要かとも推される。

Bと仮称する壕は沢にほぼ直線的に切り落されていることが判った。これにより前年度調査区では"いちい（オンコ）"の根元にあたり完掘できなかったBの南東端もほぼ同様の形態かと推される。

Bの壕を渡る橋の柱跡等が検出されたが、このため63年度の土層観察は再考する必要が生じた。中央が未発掘ではあるが、単純に真中に通路を設けるというスタイルではないようである。又この柱跡に隣接して土壙が検出された。土壙内からは甕、碗皿が一括出土している。陶磁器が検出された下位には焼土層が堆積し、床、壁面の状態は明確ではないが火を用いた可能性が高い。一括出土の碗皿類は全て再加熱を受け、又甕の底部等にも痕跡がある。出土時に下位であった甕の内壁には炭化穀物が付着し、一部痕跡も見られる。円盤状の骨製品、獣魚骨も火熱を受けている。尚、炭化穀物は粒径が小さく、肉眼観察では前年松谷先生により"キビ"と同定されたものに類似している。又、甕以外の陶磁器に密着していた土壙中から同じ種子が検出されている。甕との出土位置関係等から、これらの陶磁器が甕の内部に埋納されていた可能性もある。骨製品は大坂城から複数の出土例があり遊戯具類とされている。[注1]

この土壙は、2、3号土壙と一連のものとして63年度調査の南東部の土壙群に対応するものとも解されるが、陶磁器の一括埋納等から別な性格が考えられる。又土壙の形成時期は空壕Bの構築年代とも関連するところである。

第二平坦面北斜面下に小さな平坦面があり、唐津、志野をはじめとする陶磁器がまとまって出土した。館の終末期を示すと推される一群の遺物が比較的原形に近い大形の破片を含み出土したが、出土状況その他遺構の性格を明瞭にできるものは

ないようである。尚、ＰＬ10－33・52・62、11－7・57、12－63、13－3・17・22（24は同一個体か）、14－2～5、16－17、等は第二平坦面柵列周辺出土陶磁器片と接合するものであり、他の遺物も本来第二平坦面に帰属すべきものが多いのかも知れない。

従来勝山館跡から志野鉄絵の類は殆んど出土していない（55年度出土の一片が今年ＰＬ．14－2、3と接合した）。唐津砂目積のものが出土しないことと勝山館跡終末年代を示唆する文献の記述とを併せ[註2]、更にこの期の総体的遺物量の減少傾向から終末期の閑散とした様子を想定していたところである。しかしながら今年度出土品の質・量はこの館が末期になってもなおかなりの位置を占めていたことを想わせている。文献の記す天正17年4月、5代慶広（初代松前藩主）の上ノ国滞在も[註3]、勝山館内と考えられよう。

猶こうした所謂桃山陶器の出土年代については本遺跡が北辺の地であることなどからも慶長後半－元和以降に比定すべきとも推されるが、勝山館跡直下の大澗湾・上ノ国漁港遺跡や上ノ国市街地にみられる砂目積唐津や初期伊万里[註4]が館内から出土していないこと、豊臣後期遺構面出土染付[註5]等に類するものが殆んど出土しないことなどといった本館跡及び周辺の状況と、唐津の京都等での出土上限を天正期とする鈴木重治氏等の見解や[註6]天正13年頃を初源とする志野（大窯Ｖ）に唐津沓形碗が伴うとする井上喜久男氏の見解とその資料中の向付[註7]、或いは長石釉（志野）による茶陶が量産される大窯後Ⅱ期の開始を1580年代とする伊藤嘉章氏の見解[註8]や井上氏の編年表[註9]などの本州における年代観[註10]と日本海を通じての搬入速度等を併せ、今少し慶長のはじめまでという記述にその下限を持ちたく思う。

本年度検出の各遺構については若干の検討すべき部分が残った。その中で柵列跡に控え柱が想定できたのは一定の成果であろう。一方壕外側、北東の平坦面には一、二の竪穴遺構も予測されるという。南東半の焼失遺構、遺物の分析等も含め課題は多い。優品を含む館終末期を示す陶磁器がまとまって出土したことは収穫である。終末期においてなお充実した様相は館の廃絶理由の一つを否定するものであり、近世初頭の上ノ国村の様子を探る手懸りともなろう。

次年度は壕の中央部分を中心とした調査の予定である。年々増加する課題を一つでも解決し勝山館の実態に迫りたく思う。一層の御叱正と御指導をお願い申し上げたい。（松崎）

註1　大坂城跡　Ⅲ　1988　大阪市文化財協会（鈴木秀典氏にご配慮を賜った。）

2　東遊雑記　古川古松軒　寛政元年（平凡社　東洋文庫版）　「古城跡一略一松前候の御先祖代々居城し給いし山一略一慶長の初めに今の松前の地へ移し給いしことと案内の者の物語なり。」

3　新羅之記録　正保三年　（新北海道史第7巻資料一）
福山秘府　安永九年　（新撰北海道史第五巻史料一）

4　上ノ国漁港遺跡　1987年　上ノ国町教育委員会

5　注1に同じ

6　「生活遺跡出土の唐津陶」鈴木重治　島根県立博物館調査報告　3　1982年（八戸市博物館佐々木浩一氏にご配慮を賜った。）
大坂城跡の石山本願寺期から豊臣氏大坂城期にかけての国産陶磁器　中川信作　大坂城跡　Ⅲ　1988　大阪市文化財協会

7　「大坂城三の丸跡における初期近世窯の様相」　井上喜久男　大坂城三の丸跡　Ⅱ　1983年

8　「瀬戸・美濃における大窯生産」　伊藤嘉章　岐阜市歴史博物館研究紀要　2　1988年

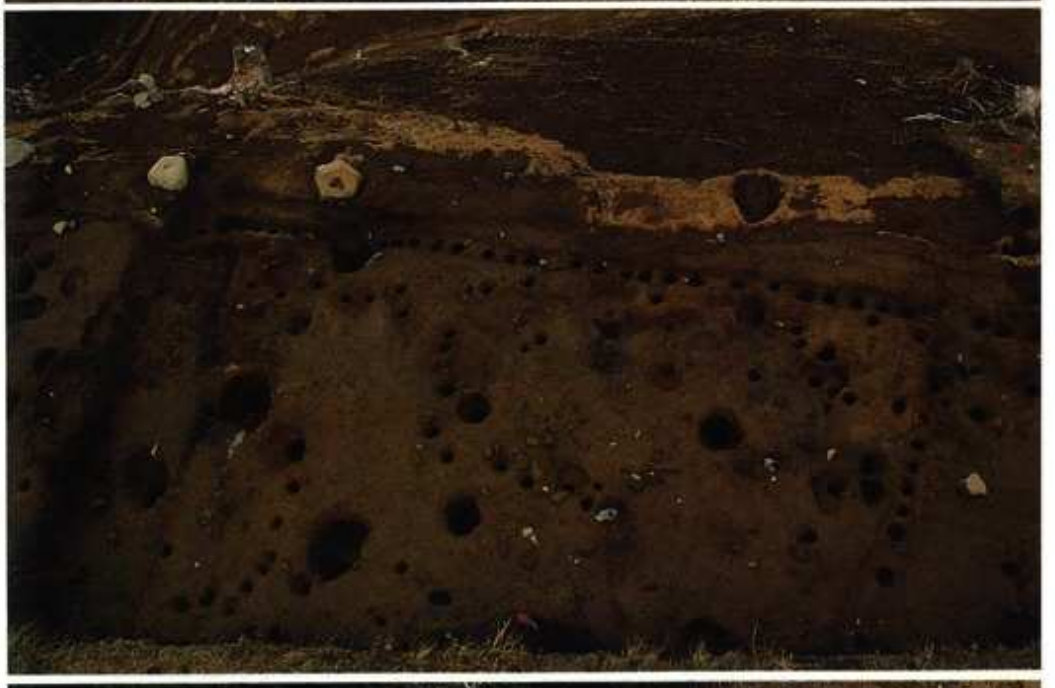
9　「美濃窯の研究（一）　15～16世紀の陶器生産　井上喜久男　東洋陶磁　15・16　1988年

10　大橋康二、垣内光次郎、工藤清泰、佐久間貴士、藤澤良祐の各氏からご教示を賜った。記して感謝申し上げたい。

図　　版

PL.1 遺構検出状況

空壕・土塙・建物跡（南西より）



柵列（南西より）

ＰＬ．２土層堆積状況

旧道路

路線A

路線B

遺物分布状況拡大（南より）

遺物分布状況（南西より）

遺物分布状況（東より）

PL.41 号土坑出土遺物

出土遺物器（壺）

出土遺物器（皿・鉢）

出土遺物器（皿）

磁器類（染付）

磁器類（染付）

磁器類（青磁）

磁器類（白磁）

遺構器（茶碗）

遺構器（御膳）

遺構器（碁盤）

遺構器（御膳）

建物跡・空壕

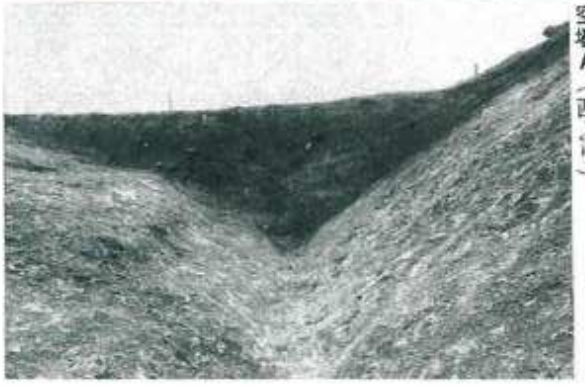
柵列（南西より）

柵列・空壕・建物跡（南西より）

空壕A・B（南東より）

建物跡・空壕（北東より）

空壕A調査



空壕A（西より）

空壕B（西より）

空堀A（西より）

一号土壙遺物出土状況（南西より）

旧道跡（東より）

一号土壙遺物出土状況（北より）

一号土壙遺物出土状況（拡大）

一号土壙遺物出土状況（南東より）

一号土壙遺物出土状況（拡大）

一号土壙骨角製品出土状況

PL. 9 遺物出土状況

発掘体験学習会

土製品出土状況

志野皿出土状況

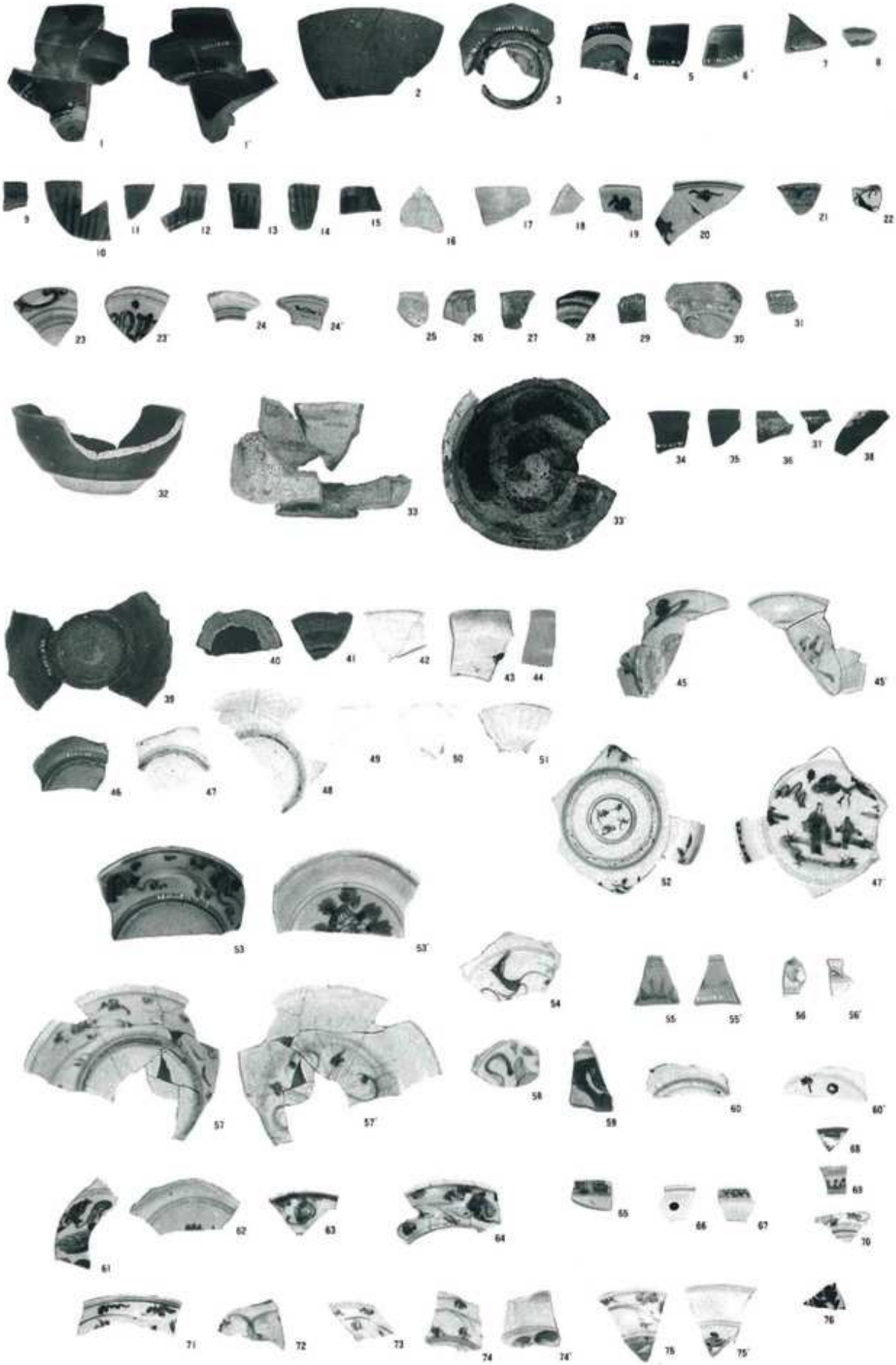
唐津皿出土状況

志野皿出土状況

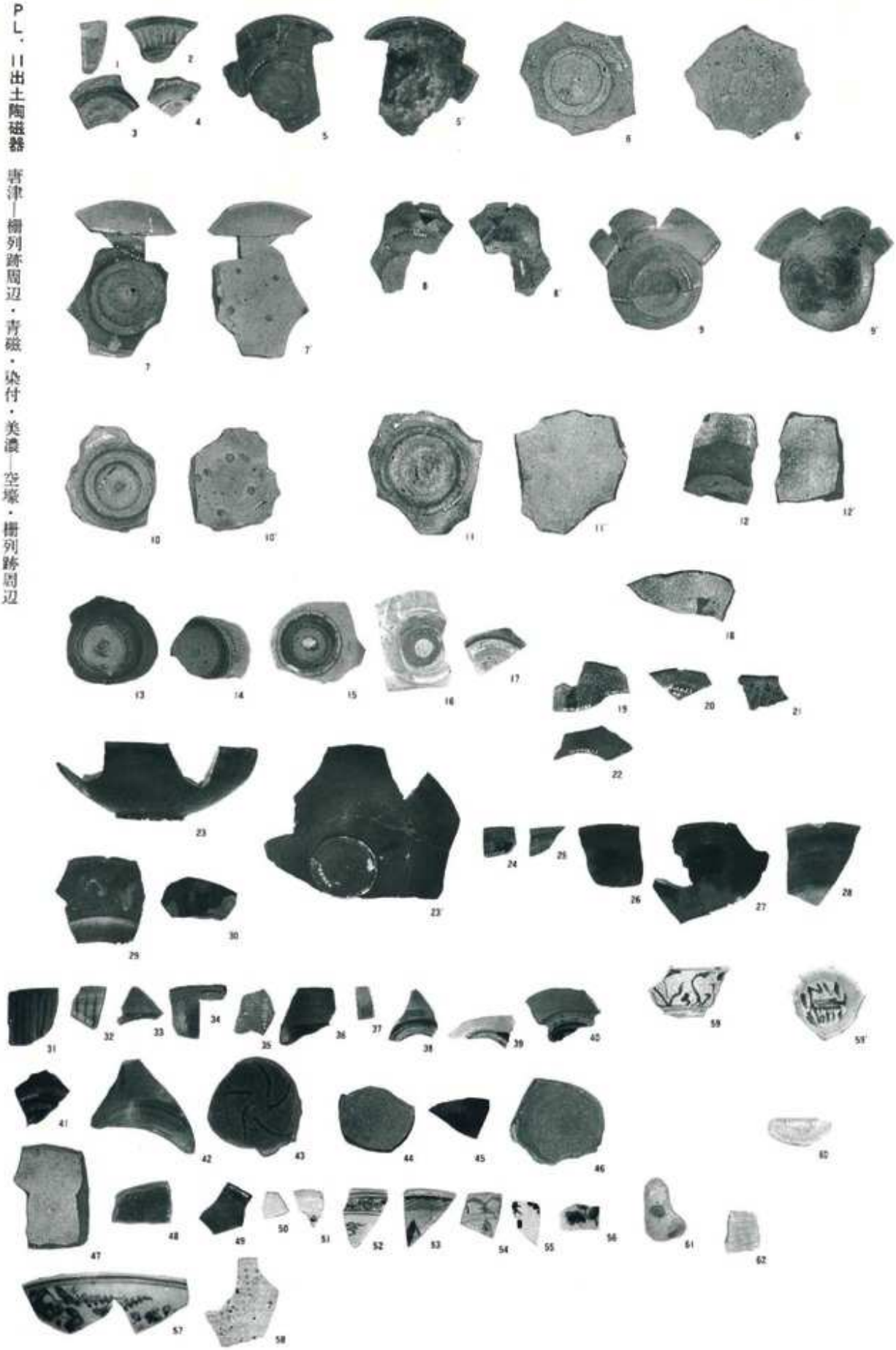
小柄出土状況

染付皿出土状況

PL. 10 出土陶磁器 青磁・白磁・染付・美濃・志野—柵列跡周辺

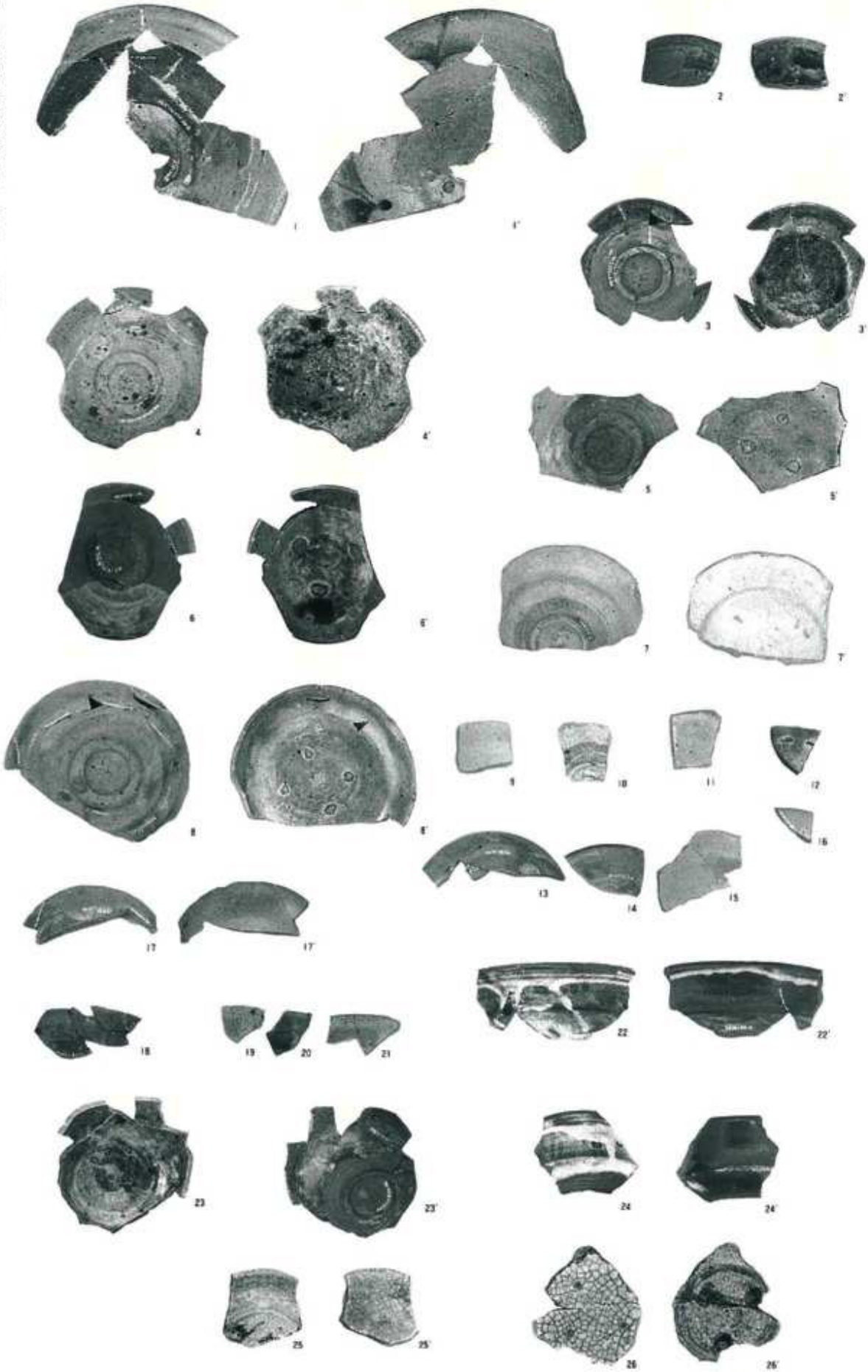


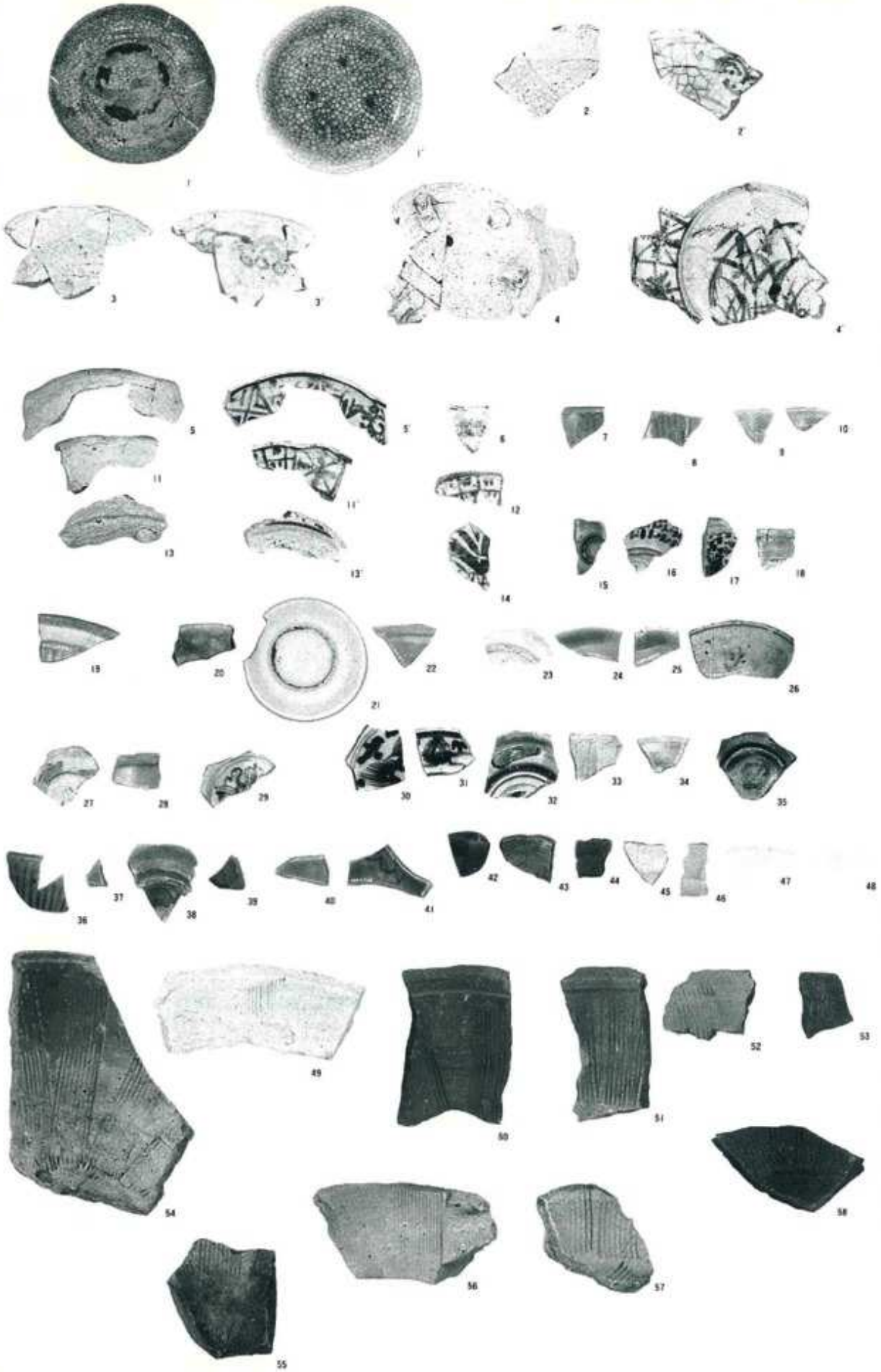
PL. 11 出土陶磁器 唐津—柵列跡周辺・青磁・染付・美濃—空壕・柵列跡周辺



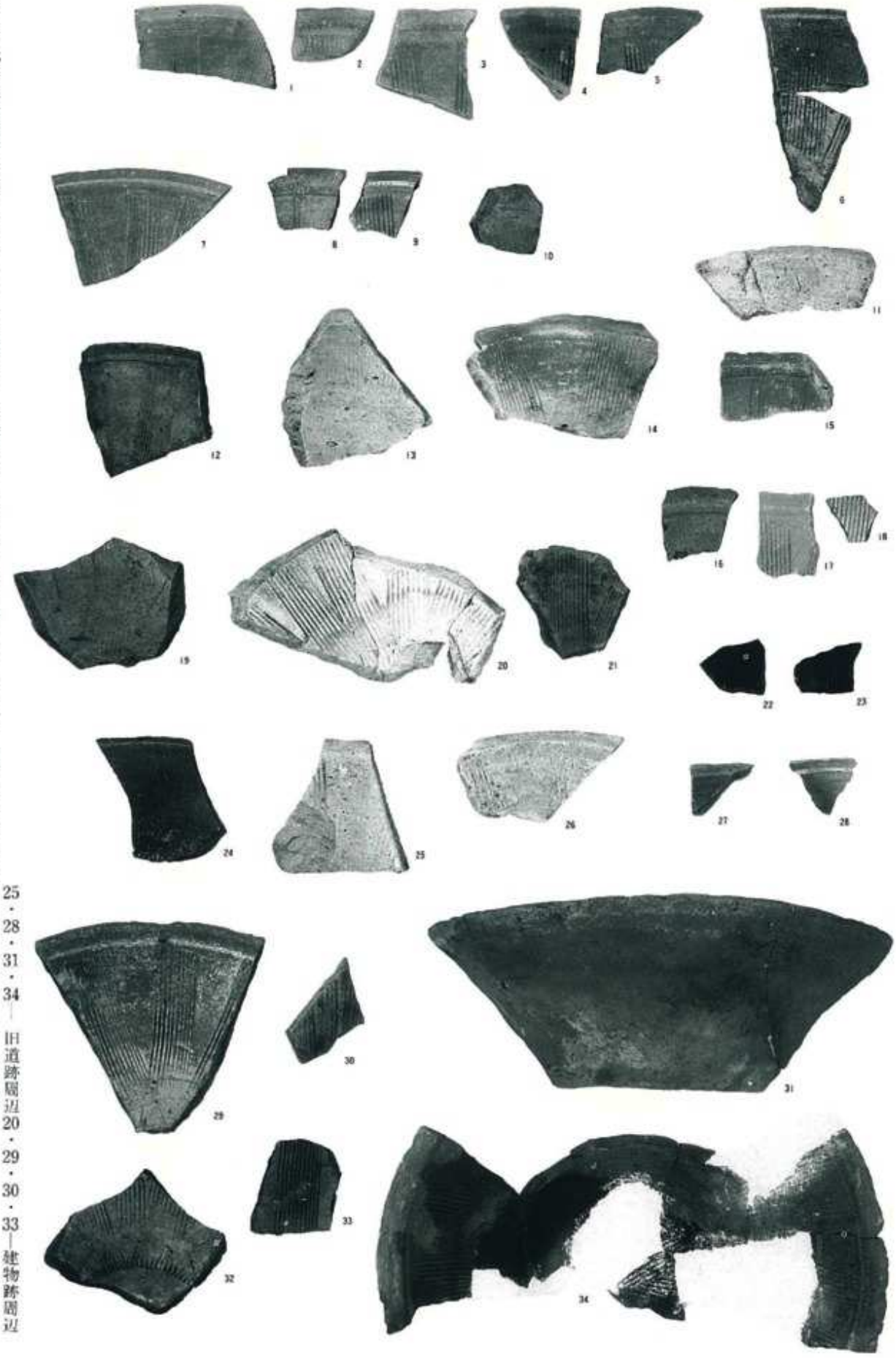
PL.12 出土陶磁器　白磁・染付（1～46）―空壕跡周辺・青磁・白磁・染付・美濃（47～77）―旧道跡周辺

PL. 13 出土陶磁器唐津・志野—旧道跡周辺





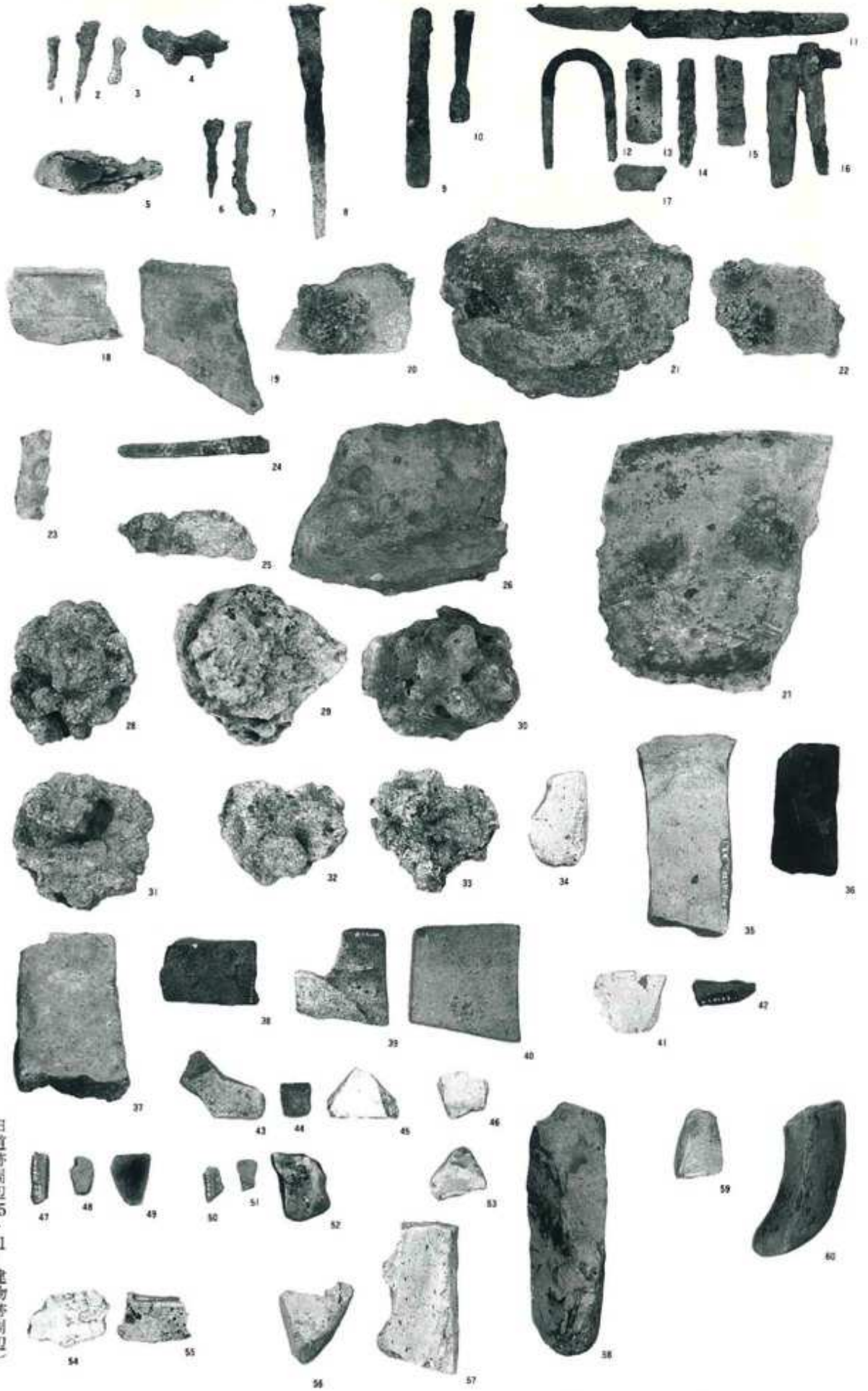
PL. 14 出土陶磁器志野（1～14）—旧道跡周辺・青磁・白磁・染付・美濃（15～35）—建物跡周辺・青磁・白磁・美濃（36～39）—表採・擂鉢（49～57）—柵列跡周辺



PL. 15 出土陶磁器（越前1・2・3・6・15・26—空壕覆土7・10・14・16・19・21・24・32—柵列・空壕跡周辺13・17・21・23・27—空壕跡周辺4・5・8・9・12・18・25・28・31・34—旧道跡周辺20・29・30・33—建物跡周辺

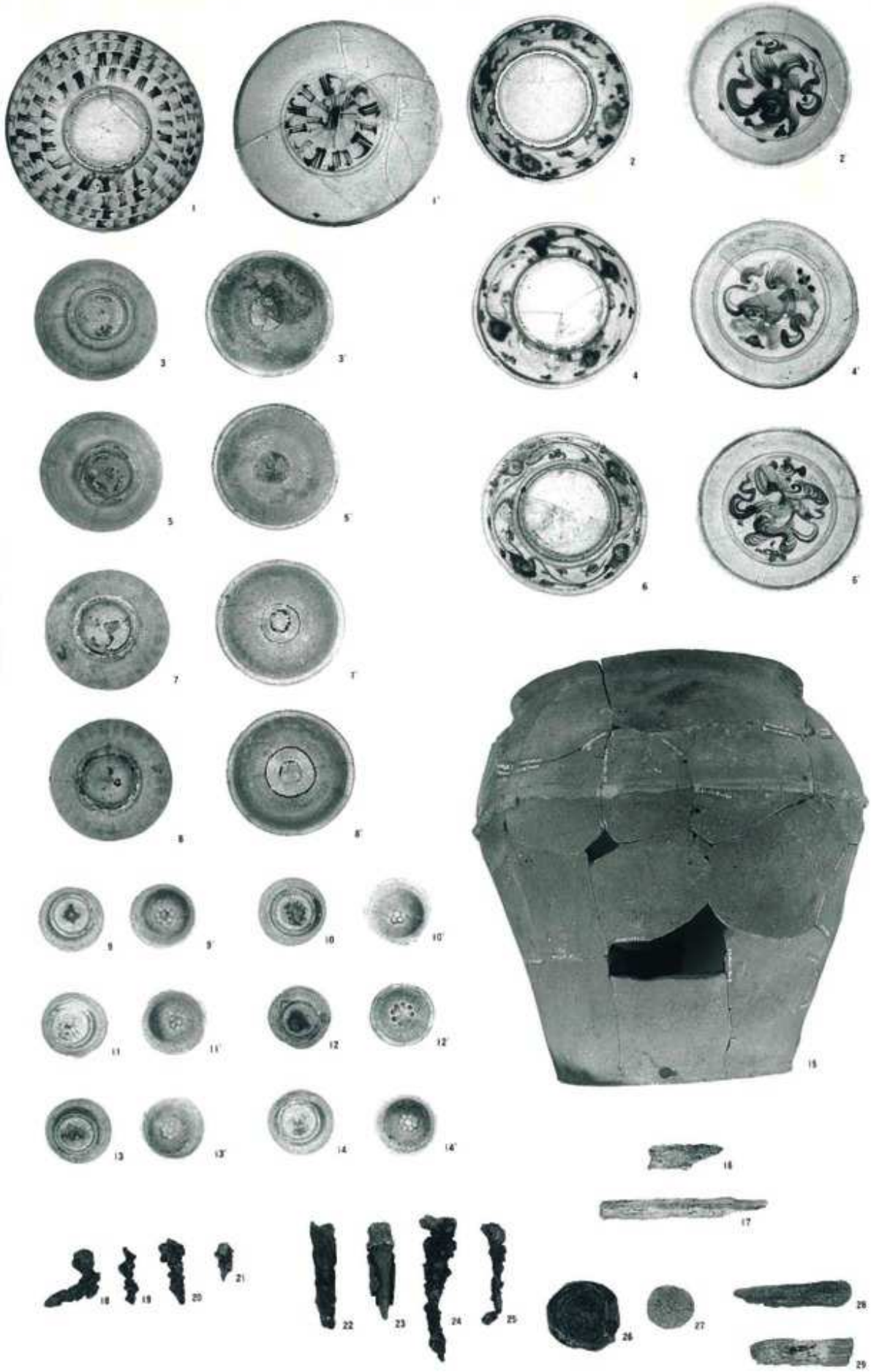
PL.16 出土陶磁器（6・9・18—柵列跡周辺1～3・17・19・20空壕・柵列跡周辺7・10・13—空壕跡周辺14—空壕覆土8・22—旧道跡周辺11・12・15・21—建物跡周辺4・5・10—表採）

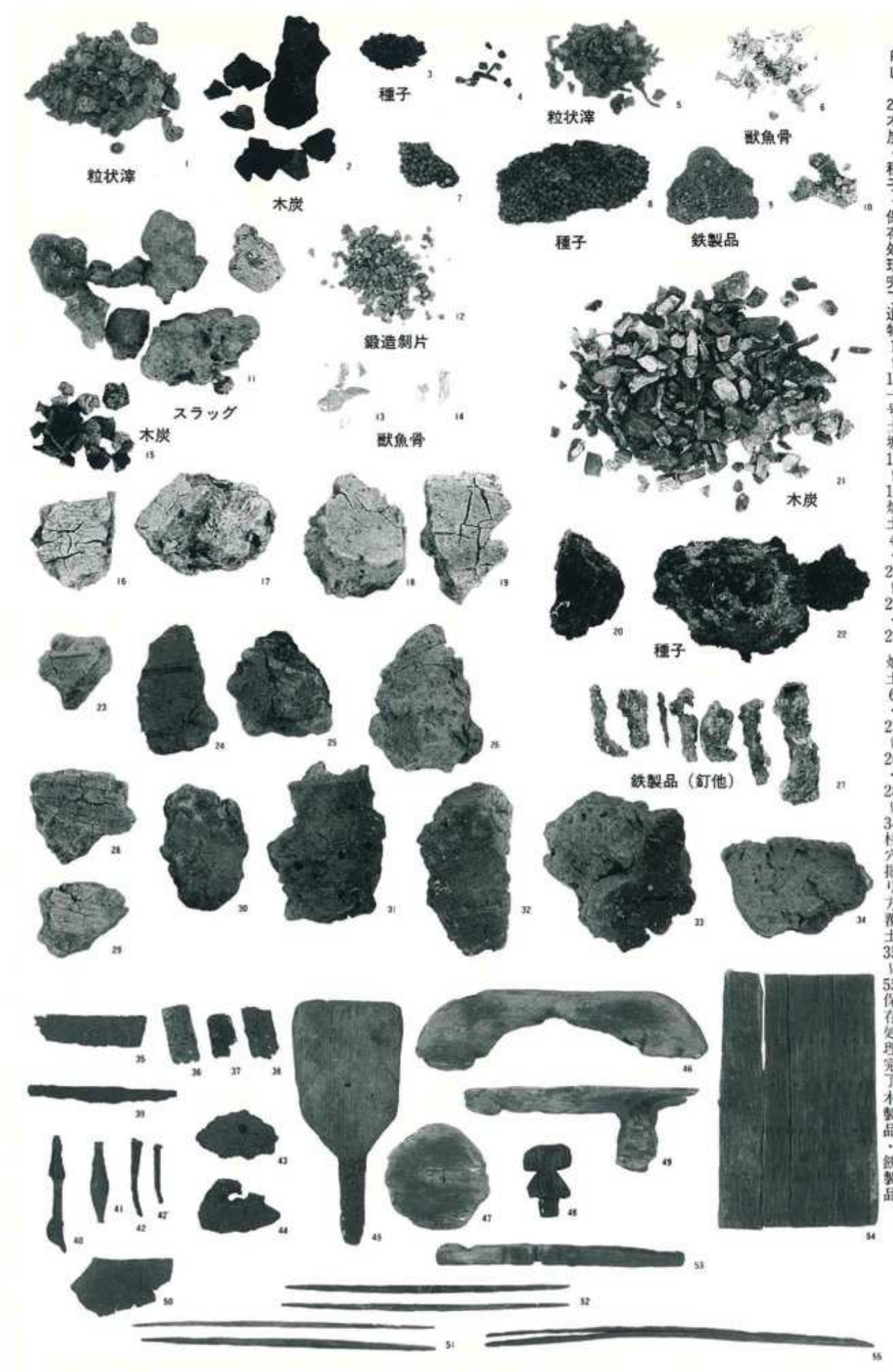
PL. 17 出土遺物鉄製品（柵列跡周辺15・16・21—空壕跡周辺24—旧道跡周辺）石製品（柵列跡周辺35・37・40・44・45・55・59—空壕跡周辺47・60—旧道跡周辺35・41—建物跡周辺）



PL. 18 出土遺物石製品（柵列跡周辺3・7・15—空壕跡周辺4・6・9・11・12—旧道跡周辺）鋼製品・銭・骨角器（29—旧道跡周辺）

PL. 19 一号土坑出土遺物青磁・白磁・染付・美濃・壺・骨角器(27)獣魚骨・鉄製品

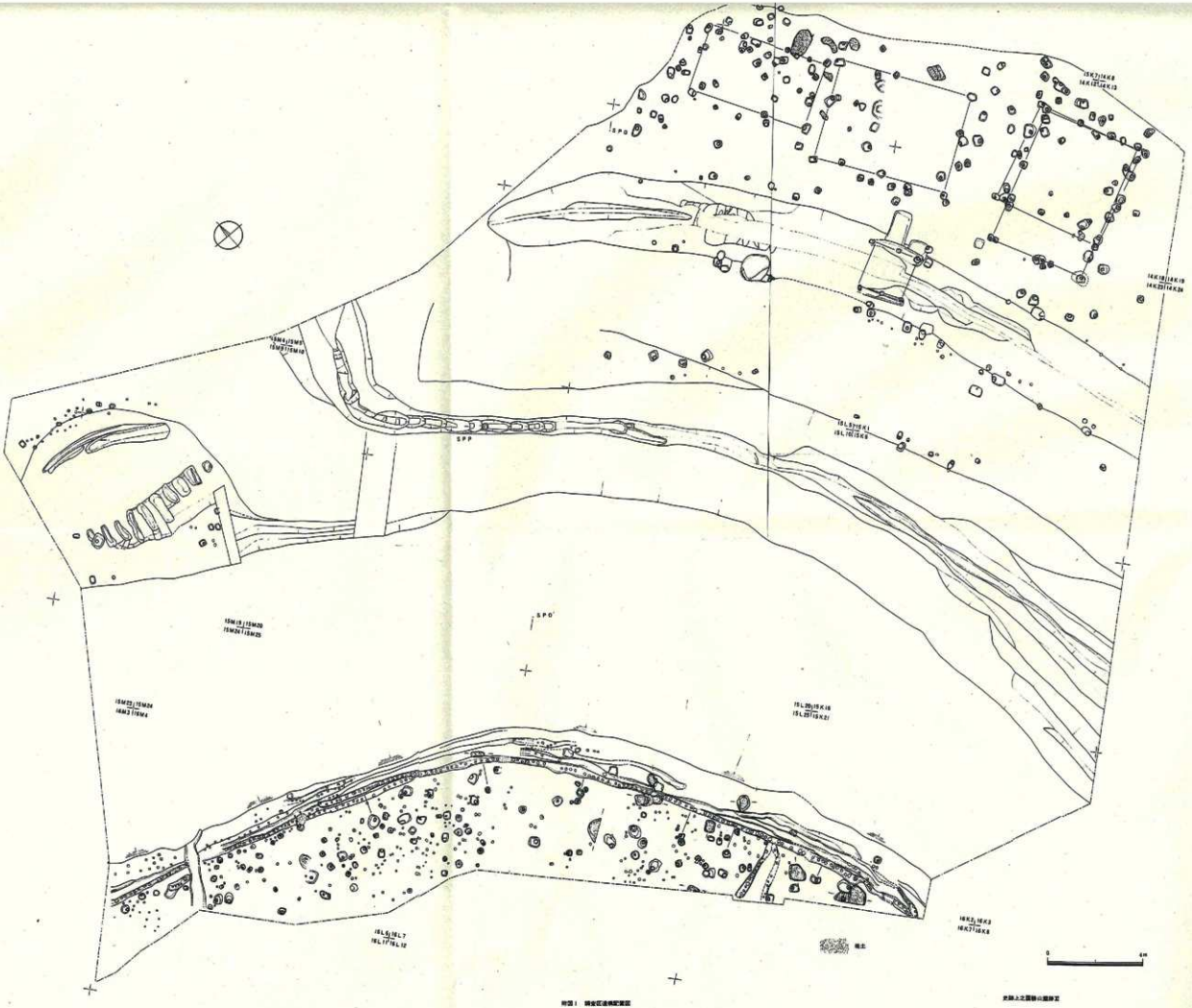




PL. 20 木炭・種子・保存処理完了遺物1～10一号土壙11～19焼土4・20～22・27焼土6・23～26・28～34柱穴掘り方覆土35～55保存処理完了木製品・鉄製品

史跡　上之国勝山館跡　XI
—平成元年度発掘調査環境整備事業概報—

発　行　上ノ国町教育委員会
北海道桧山郡上ノ国町大留100
印　刷　平成２年３月25日
発　行　平成２年３月31日
印刷所　(協)高速印刷センター



第図1　調査区遺構配置図

大林上之園遺跡出土遺物